学苑　No.781　(107)～(135)　(2005・11)

インド北部地域都市広場形態についての考察

―2005年第18回海外都市広場調査報告―

芦川　智・金子友美
鶴田佳子・高木亜紀子・徳永陽子

The Report on the Form of City Squares in North India

―The Field Survey of City Squares in Foreign Countries No.18―

Satoru ASHIKAWA, Tomomi KANEKO,
Yoshiko TSURUTA, Akiko TAKAGI and Youko TOKUNAGA

Though our trip was limited to 13 days, we investigated the city squares and open spaces of 10 cities in the northern Indian states of Rajasthan and Uttar Pradesh.

The cities included the capital Delhi, Jodhpur a fort city in a desert-like climate, Pushkar spreading around the circumference of a sacred lake, Jaipur famous for its pink stone buildings, the Islamic city Ajmer, Abhaneri known for stairwells called *kunda*, a small fort city Roopangarh, Mathura along the Yamuna, old historic Agra, and the sacred place Varanasi.

So far the field work has revealed that in those cities with Hinduism and among a great variety of chaotic elements, there is a real demarcation of the 'sacred' and 'secular' in the community spaces. *Ghat*, for instance, might function as the threshold between 'repose' and 'life'. The choice of the above 10 cities, though not sufficient in number, gave us this insight.

Key words: city square（都市広場）, *open space*（空地）, *field survey*（フィールド調査）, *community space*（コミュニティー空間）, *Hinduism*（ヒンドゥー教）, *ghat*（ガート）

(1) はじめに

都市の広場に目を向けて研究の対象としたのは1984年のことであり，現在（2005年）で，21年目となる。当研究室における継続的研究テーマ，10年間の中心課題として，海外都市広場の調査を始めたのが1990年である。調査報告は今回で15年目であるが，調査自体は18回目となる。以下にこれまでの調査実施状況を示す。

第1回は，東ヨーロッパ（ドイツ，ポーランド，チェコスロバキア，ハンガリー，ユーゴスラビア5カ国）を対象として行われ，第2回は東ヨーロッパ（ハンガリー，ルーマニア，ブルガリア）とトルコ，ギリシャ，イタリアの6カ国を対象とした。第3回はトルコ，ギリシャ2カ国を対象とし，第4回は，北欧とフランドルを中心としてドイツ，スイス，フランスを付加。第5回はアラビア半島南端のイエメンを，第6回はイタリア北部地域を対象として行われた。第7回は，モロッコ，ポルトガル，スペインの3カ国で実施され，第8回は，南仏，スペイン，ポルトガルの3カ国であった。第9回調査は，第6回の北部イタリアを補完するべく南部イタリアを対象地域とした。第10回調査は，ヨーロッパ中央部であるドイツを中心に，その周辺部を含めて対象地域とした。第11回調査は，第10回調査の補完の意味を含めてポーランドとベネルクス3国を対象地域とした。第12回調査は，チベットとネパールを対象地域とし，第13回目の調査はロシア・バルト3国とした。第14回目調査は中国蘇州周辺と三江周辺の2地域とした。第15回目調査はフランス，スイス，イタリアで実施し，2000年にヨーロッパで実施した駅空間の調査等の報告も加えている。第16回目の調査はインドネシアのバリ島とし，第17回調査はフランス南西部とした。今回の第18回調査は短期間にインド北部地域で行っている。

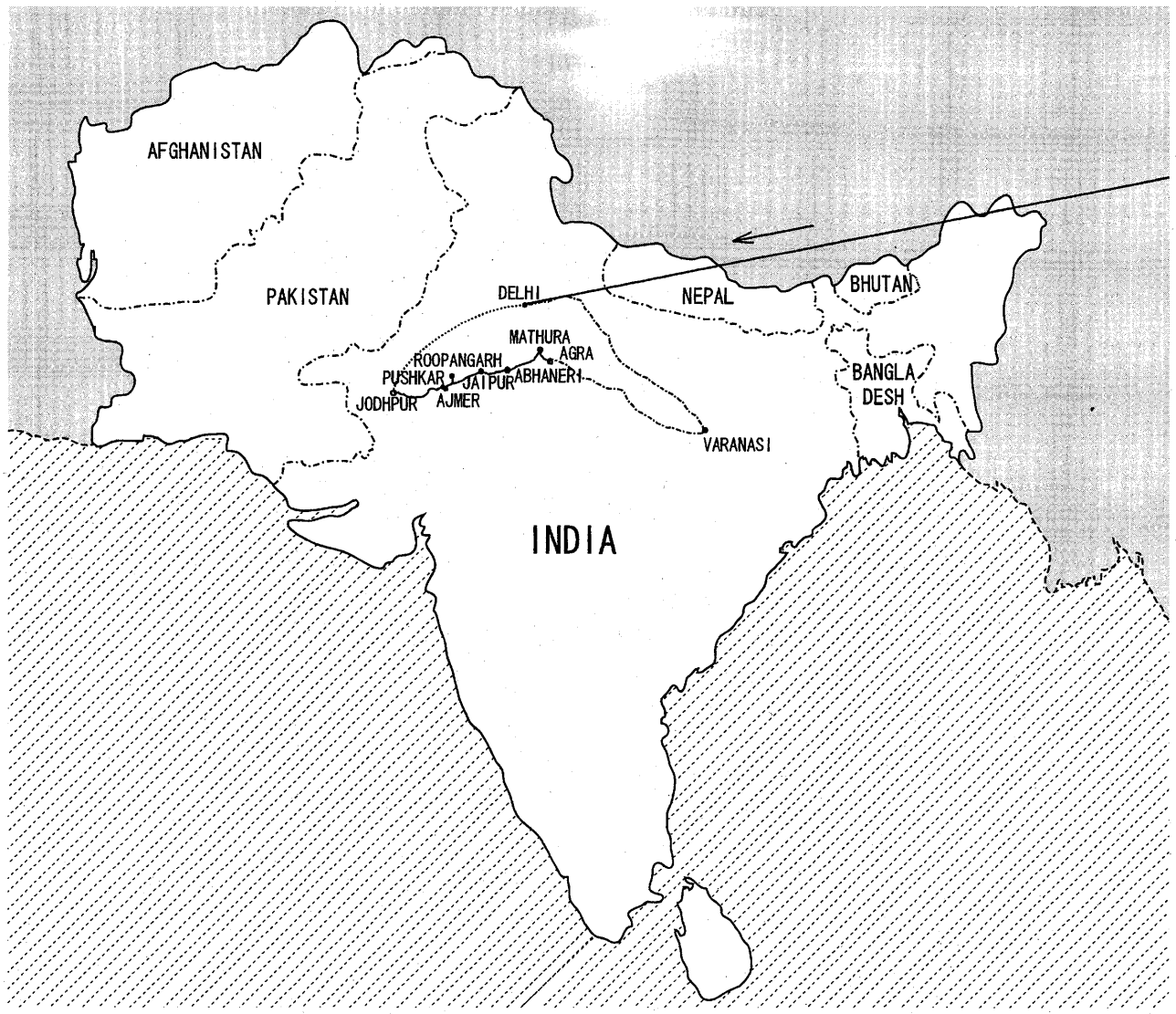
（2）調 査 計 画

第１回調査：東ヨーロッパ（ドイツ，ポーランド，チェコスロバキア，ハンガリー，ユーゴスラビア５カ国）
［平成２年９月初旬から25日間実施］
第２回調査：東ヨーロッパ（ハンガリー，ルーマニア，ブルガリア，トルコ，ギリシャ，イタリアの６カ国）
［平成３年８月初旬から28日間実施］
第３回調査：トルコ，ギリシャ２カ国
［平成４年７月末から27日間実施］
第４回調査：北欧とフランドルを中心としてドイツ，スイス，フランスを加えた地域
［平成５年９月初旬から18日間実施］
第５回調査：アラビア半島南端のイエメン
［平成６年５月に13日間実施したが，内戦勃発のため中断，平成７年５月に再度実施］
第６回調査：イタリア北部地域
［平成６年７月末から25日間実施］
第７回調査：モロッコ，ポルトガル，スペインの３カ国［平成７年８月21日から29日間実施］
第８回調査：南仏，スペイン，ポルトガルの３カ国
［平成８年９月２日から24日間実施］
第９回調査：南イタリアを中心として北イタリア，オーストリアを加えた地域
［平成９年８月21日から25日間実施］
第10回調査：中欧地域としてドイツを中心にチェコ，フランスを加えた３カ国
［平成10年８月10日から27日間実施］
第11回調査：ポーランド，ベネルクス３国の４カ国
［平成11年８月２日から22日間実施］
第12回調査：チベット，ネパールの２カ国
［平成12年８月24日から15日間実施］
第13回調査：ロシア，バルト３国等の７カ国
［平成13年８月４日から27日間実施］
第14回調査：中国蘇州周辺及び三江周辺
［平成14年８月29日から14日間実施］
第15回調査：フランス，スイス，イタリアの３カ国［平成15年８月25日から21日間実施］及びイギリス，フランス，スイス，イタリアの４カ国［平成12年９月14日から25日の12日間実施］，鶴田佳子の単独調査地を付加。
第16回調査：インドネシアのバリ島
［平成16年３月14日から６日間実施］
第17回調査：フランス南西部
［平成16年９月16日から10日間実施］
第18回調査：今回の調査はインド北部地域に限定して実施。
［平成17年３月12日から24日の13日間実施］

（3）調 査 概 要

①調査対象地域：インド北部
②実 施 期 間：2005年３月12日～24日の13日間
③調査メンバー
調査研究責任者：芦川　智
（昭和女子大学生活機構研究科教授）
調査研究責任補助者：金子友美
（昭和女子大学生活環境学科講師）
同　：鶴田佳子
（昭和女子大学現代教養学科講師）
同　：高木亜紀子
（昭和女子大学生活環境学科助手）
調査研究スタッフ：徳永陽子
（本学生活環境学科２年）
④2005年調査日程及び調査行程図（図－１）

1．３月12日(土)TOKYO→DELHI
2．３月13日(日)DELHI
3．３月14日(月)DELHI→JODHPUR
4．３月15日(火)JODHPUR→PUSHKAR→AJMER
5．３月16日(水)AJMER→(KISHANGARH)→ROOPANGARH→AJMER
6．３月17日(木)AJMER→JAIPUR
7．３月18日(金)JAIPUR→ABHANERI→MATHURA→AGRA
8．３月19日(土)AGRA→(TUNDLA)→(夜行列車)
9．３月20日(日)→VARANASI
10．３月21日(月)VARANASI→(夜行列車)
11．３月22日(火)→DELHI
12．３月23日(水)DELHI
13．３月24日(木)DELHI→TOKYO



図－1　調査行程図

（4）調査内容と方法

調査準備は文献収集から始まる。文献資料から調査対象候補都市を選定し，その都市図と調査すべき広場の状況を把握し，歴史的経緯を読みとる作業を例年のごとく行った。一都市に広場は多く存在するが，その都市の中心となる空間を探し，そこに存在する広場を対象としていくことが原則である。

目標の都市に到着すると，その都市の市街地図や道路標識などを手がかりとし，現地の住民にヒアリングをしながらセンターゾーンにアプローチする。都市のセンター概念の明確な今回の場合は比較的センターと広場が対応している場合が多かった。

①調査内容：具体的な調査内容は以下のようになる。

●測定・作業：平面形態（平面図の作成）／規模の測定／ファサードの記録（ビデオ，写真）／関係資料の収集（地図，パンフレット，絵はがき，文献等）

●観察・確認項目：都市における位置／広場名称／広場機能／周辺建築の種別

●その他，各調査員による観察・ヒアリング等

②調査機材：カメラ，ビデオ，距離測定機器，コンベックス，スケッチブック等

（5）調査の結果

今回の調査は，インド北部地域のラージャスターン州とウッタル・プラデーシュ州の二つの州にまたがる10都市で行った。13日間の短い調査旅行であったが，それぞれの都市で特色ある様相を観察してきた。首都デリーはウッタル・プラデーシュ州の北のはずれであるが，むしろ隣接するハリヤーナ州に属するといった方がよい位置にある。

ラージャスターン州は面積34万2239㎢で，人口5650万人を擁する。風土的にいうと北東部はパキスタンと接し，その地域の大半が砂漠地帯であるが，東側はモンスーン地帯に接するなど，きわめて多様な風土条件を有する地域である。地形的には南東部の山岳の多い地域と，ガンジス川流域部が区別される。このラージャスターン州はインド屈指の主要観光地としての特色を有し，数多くのインドを代表する観光地を擁している。

一方のウッタル・プラデーシュ州は面積23万1254㎢，人口1億6610万人と稠密な地域である。いわゆる「ヒンディ・ベルト」と呼ばれる地域に属し，またインドの政治・文化に最も大きな影響を与えてきた州として位置づけられる。ヒンドゥー教の聖なる川ガンジス流域を含み宗教を語る上でも重要な州として位置づけられる。風土的にはガンジス川流域での典型的なモンスーン気候といえる。

今回調査対象の10都市は，首都デリー，砂漠に近い風土の城塞都市ジョードプル，聖なる湖の周りに広がるプシュカル，イスラム都市アジュメール，小さな城塞都市ルーパンガル，ピンクの石に囲まれたジャイプル，アーバーネリー，ガンジス川の支流ヤムナー川沿いのマトゥラー，アーグラー，ガンジス川沿いの聖地ヴァラナシを対象としている。これらの10の都市は，インド北部地域の特色を短期間で把握するためには，有効な都市群であったと判断している。交通事情が良好でないインドで1200㎞を越える行程であることから，現地旅行会社 INPAC（日本の旅行会社西遊旅行）に一回のフライト，二回の夜行列車の移動を含め，可能な部分でドライバー付きのバスを手配し，調査旅行を実施した。

（6）調査対象となった都市と広場の概要

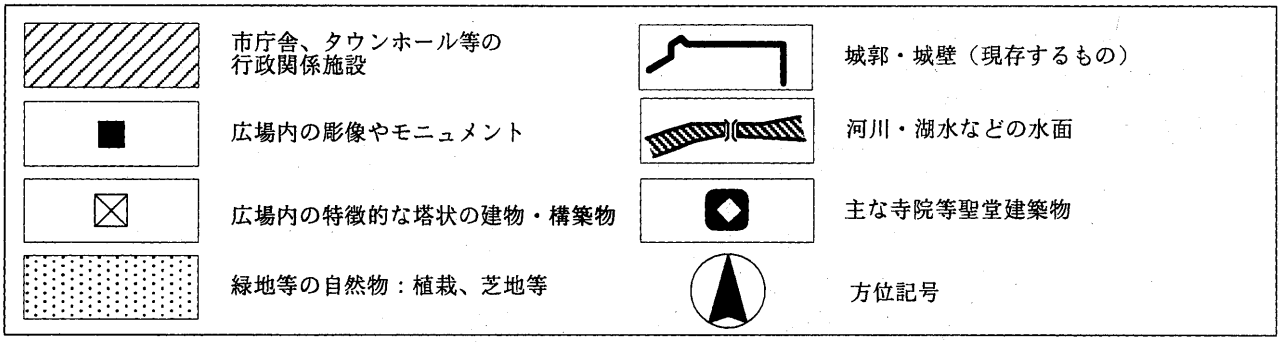
（表－1　第18回海外都市広場調査リスト）

＜インド諸都市を理解するための言葉リスト＞

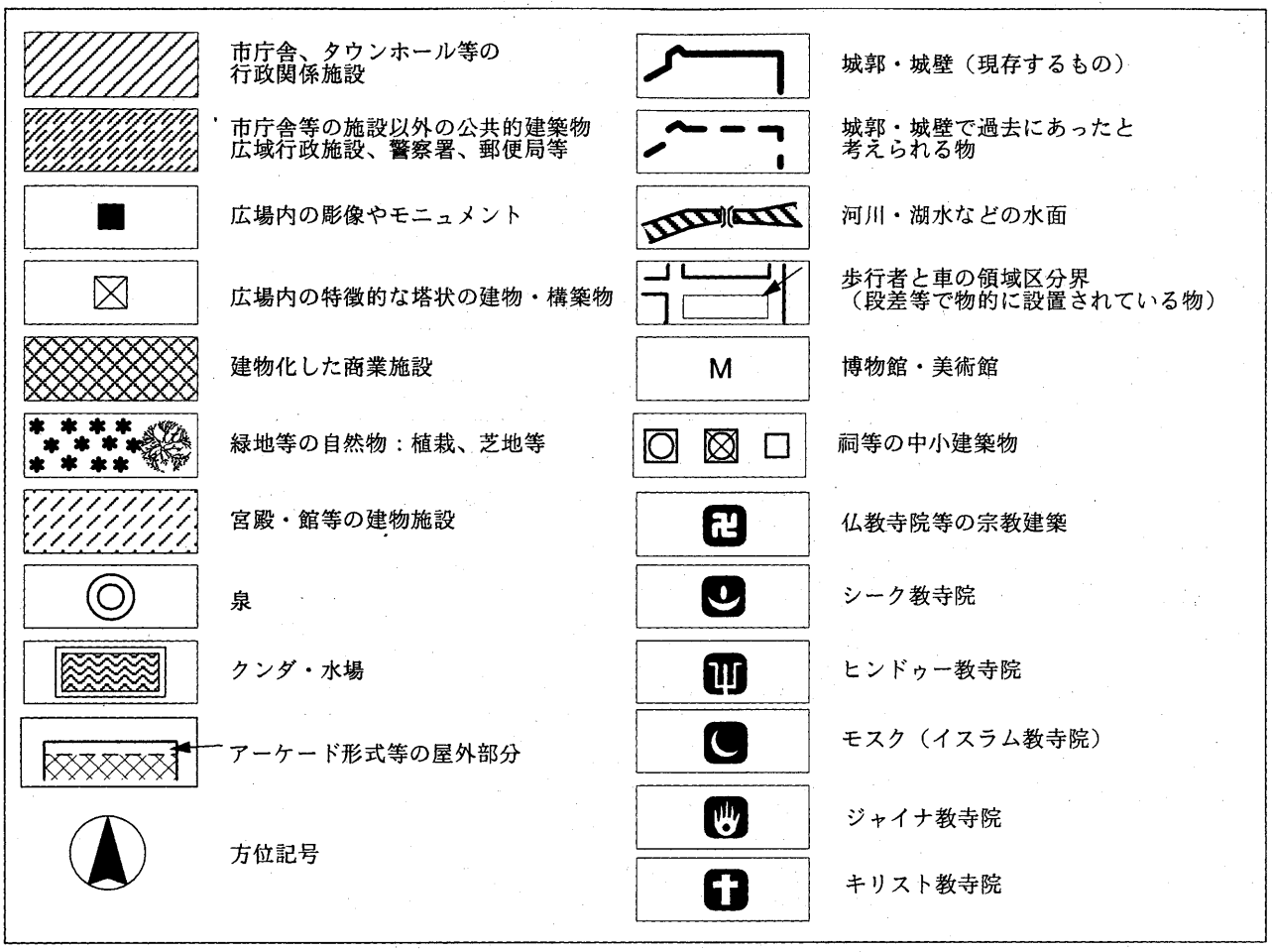
バオリ　baoli/baori
　階段を備えた貯水池，貯水井戸
ブラフマー*　Brahma　ヒンドゥー教の神
チャッタ・チョウク　chatta chowk
　屋根のあるバザール
チョウパル　chaupar　広場
チョウク　chowk　町の広場，交差点，市場
ダルガー　dargah　スーフィー聖者の墓廟
カトゥラ　katra　市場
ガネーシュ　Ganesh　ヒンドゥー教の幸運の神
ガート　ghat　川岸に造られた階段
ハヌマーン　Hanuman
　ヒンドゥー教の猿の姿をした神
ジャマー・マスジッド　jama masjid
　金曜モスク
ジャンタル・マンタル　Jantar Mantar
　ジャイプルの藩王で天文学者でもあったジャイ・シン2世が造った天文観測所
クリシュナ　Krishna
　ヴィシュヌ**の8番目の化身
クンダ　kunda　階段で囲まれた貯水槽
ラクシュミー　Lakshmi
　ヴィシュヌ**の妃でヒンドゥー教の富の女神
マハーラージャ　maharaja
　“偉大な王”の意，君主
マンダラ　mandala
　輪，ヒンドゥー教・仏教芸術で宇宙のシンボルとして描かれる，曼陀羅
マンディ　mandi　市場
マンディール　mandir　寺院
マスジッド　masjid
　モスク，イスラム教の礼拝所
ミナレット　minaret　尖塔
ムガル　Mughal　インドのイスラム王朝
キラー　qila　要塞
リクシャー　rickshaw
　客を乗せて走る，二輪もしくは三輪で小型の乗り物
サダル　sadar　主な
サヴィトリ　Savitri　ブラフマー*の妃
シヴァ　Shiva
　ヒンドゥー教の破壊の神であり，同時に創造の神
ヴィシュヌ**　Vishnu
　ヒンドゥー教の維持と復元の神

表－1　第18回海外都市広場調査リスト

連番	広場コード番号	都市・集落名	調　査　対　象	備考（都市・集落の概要）
		デリー	通り・市場・広場	ヤムナー川の西岸に広がるインドの首都
1	IND-05-001	DELHI	CHANDNI CHOWK GAUR SHANKAR KATRA DHULIA HANUMAN TEMPLE NAI SARAK	ムガル帝国皇帝シャー・ジャハーンが築いた旧市街オールド・デリー。その中心の大バザールがチャンドニー・チョウクである。ラール・キラーから西に延びている通りであり，商業施設，さらに枝分かれする複数の市場通りを含む。各種寺院や市庁舎が並ぶ。
		ジョードプル	市場	ラージャスターン州第２の都市
2	IND-05-002	JODHPUR	CLOCK TOWER MARKET	ジャイプルの西300km。大タール砂漠の縁に沿って広がるインド北西部の城下町。10kmに及ぶ城壁に囲まれた旧市街は，ほとんどの建物が青で統一され，「ブルーシティ」と呼ばれる。町の北西には荘厳なメヘランガル城が建つ。
		プシュカル	ガート，市場（通り）	アジュメールの西11km，ヒンドゥー教の聖地
3	IND-05-003	PUSHKAR	BRAHMA GHAT SAVITRI GHAT PASHURAM GHAT INDRA GHAT SADAR BAZAAR	ガート，白く塗られた寺院や住宅に取り囲まれた，聖なる湖，プシュカル湖が町の中心となっている。毎年開かれるラクダ市が有名。
		アジュメール	ダルガー，広場，市場	ダルガーの参拝者で賑わうイスラム教色の濃い都市
4	IND-05-004	AJMER	DARGAH	スーフィーの聖人，クワージャー・ムイヌッディーン・チシュティーの廟，ダルガーのある町として知られている。ダルガー周辺に広がるバザール（DARGAH BAZAAR, NALLA BAZAAR, NAYA BAZAAR）が旧市街のほとんどを占めている。
	IND-05-005		MADAR GATE	
		ルーパンガル	城塞，市場（通り），住宅	ラージャスターン州の小規模な城塞都市
5	IND-05-006	ROOPANGARH	SADAR BAZAAR 住宅A･B	アジュメールの北約50kmに位置し，マハーラージャ ROOP SINGH が建設した。SAMBHAR 湖（塩湖）に添ったキャラバンルート上の都市。
		ジャイプル	広場	ラージャスターン州の州都
6	IND-05-007	JAIPUR	BADI CHAUPAR TRIPOLIA BAZAAR JOHARI BAZAAR RAMGANJ BAZAAR SIREDEORI BAZAAR	1727年にジャイ・シン２世によって建設された計画都市。城壁で囲まれた旧市街は碁盤の目状に道路網が配置されている。建物はピンク色に統一され「ピンクシティ」とも呼ばれている。
		アーバーネリー	クンダ，寺院	ラージャスターン州の代表的なクンダと集落
7	IND-05-008	ABHANERI	KUNDA HARCHASHAT MATA TEMPLE	ジャイプルから東へ約95km。９世紀のハルシャ・マーター寺院がある。クンダと寺院が集落の中心となっている。
		マトゥラー	ガート	インド北部ウッタル・プラデーシュ州マトゥラー県の県都
8	IND-05-009	MATHURA	VISHRAM GHAT	マトゥラーは古くから交易の要衝で，インド彫刻マトゥラー美術を創出した地でもある。現在はクリシュナ神話・信仰の聖地ブラジュ地方の中心都市である。
	IND-05-010		NALLA GHAT	
		アーグラー	市場（通り）	ウッタル・プラデーシュ州アーグラー県の県都
9	IND-05-011	AGRA	RAWAT PARA BAZAAR NAMAK MANDI BAZAAR KINARI BAZAAR	16世紀半ば，ムガル帝国第３代皇帝アクバルがアーグラーに首都を置き，以後約１世紀の間，帝国の中心都市として繁栄した。現在は，タージ・マハル，アーグラー城を拠点とした観光都市として世界中から観光客を集めている。
		ヴァラナシ	ガート，市場（通り）	ウッタル・プラデーシュ州のヒンドゥー教，仏教の一大聖地
10	IND-05-012	VARANASI	DASASHWAMEDH GHAT MANIKARNIKA GHAT	聖なるガンジスの左岸に位置し，川の西岸に100あまりのガートがあり，その長さは５kmに及ぶ。年間100万人を超える参拝客が訪れ，市内には1500近いヒンドゥー教寺院と270以上のモスクがあるという宗教都市である。
	IND-05-013		VISHWANATH TEMPLE	



図－2　都市図の凡例



図－3　広場形態の凡例

（7）インドという国

人口10億6500万人を抱えるインドの面積は328万㎢（中国の1／3強の面積）を有するが，人口に関しては，21世紀中には中国に匹敵する数に達するともいわれている。そうしたエネルギーを秘めているインドは，その文化の点でも，たどってきた歴史についても，きわめて特色ある地域である。「最後に旅するのはインドである」とよくいわれるようにその魅力は奥深いものがあるであろう。

インドにおける主たる宗教はヒンドゥー教であり，その人口における比率は82.4％と，圧倒的多数を占める。続いて，イスラム教徒12.2％，キリスト教徒2.4％，シーク教徒1.9％，仏教徒0.8％，ジャイナ教徒0.4％と続く。世界3大宗教といわれるイスラム教，キリスト教，仏教が，インドにおいてはそれ

ぞれ，第2位・第3位・第5位を占めている。この三大宗教のうちキリスト教，イスラム教が一神教であるのに対して，インドの主たる宗教ヒンドゥー教は多神教であり，そのことがインドにある特徴的な地域性を付与したように考えられる。

こうした宗教について，今回の調査においては不可避的なものであった。というのも第16回調査のバリ島と同様，インドでは宗教と共に生きて，宗教のもとに空間が規定され，宗教によって行動している人々の姿がそこここにあったからである。

ヒンドゥー教についで第2位を占めるイスラム教は，ムガル帝国の繁栄を考えると第2位というのも当然のことのように思えるが，その後のパキスタンやバングラデシュ独立の歴史を考えると，その12.2％という数字は意外にも思われる。

また，最終調査地であるヴァラナシにある，ヒンドゥー教徒の聖地黄金の寺では，異教徒の拝観を厳しく拒否しているが，その黄金の寺とイスラム教のモスクが隣り合わせていることも不思議に思えてくる。

現在インド共和国の政権をにぎるマンモハン・シン首相は，人口比率では約1.9％，第4位を占めるシーク教徒であり，ヒンドゥー教における第3の神ヴィシュヌには，仏教におけるブッダが含まれているという。こうしたことなどを考えると，ヒンドゥー教は他の3宗教を内包する可能性のある，包容力に富んだ宗教といえるのではないか。ヒンドゥー教だけで3億3000の神が存在するといわれ，そのうえ宗教自体が多数存在するインドは，そうした意味で，多くの神々に囲まれた国土であるといえる。

インドの歴史の中で，イスラム王朝が樹立された12世紀末から，イギリスの東インド会社が事実上ムガル帝国のイスラム王朝を弱体化に追い込みイギリス植民地化をすすめた19世紀までの7世紀の間，北インドにとっては重要な時期であった。この間の最盛期に統治したムガル帝国の皇帝（1代バーブル，2代フマユーン，3代アクバル，4代ジャハーンギール，5代シャー・ジャハーン，6代アウラングゼーブ）によって北インドの都市には多くのムガル帝国の遺構が残されており，当時の文化の程度の高さを知ることができる。このイスラム王朝が繁栄を続けた5世紀の間，ヒンドゥー教徒はどうあったのか，ここでもまた疑問がわく。

インドについて考える場合，いわゆるカースト制度に触れずに論を進めることはできない。これはバラモン（僧侶），クシャトリア（戦士），ヴァイシャ（商人），シュードラ（農民）という4つのカーストに区分される，というのは日本人が教科書的に教えられるものであるが，実際はもっと複雑であり，4つの階層性を規定するヴァルナは，生まれを規定しているのであるが，さらにジャーティと称する，日常生活において地域社会の独自の機能を果たす集団としての規定があり，生業などに対応して2000から3000に分けられるという。それにより生活する場所や婚姻をはじめ，使用する井戸も区別されているという。近代化によりカースト制度は撤廃されたというがそれは大都市のことであり，貧富の差が激しい社会の中で，農村部ではゾーニング，内婚制，カースト別居住など，村落生活者にとって所属カーストへの依存度はあいかわらず強いといわれている。カーストとは見えない境界線で，それを越えることは許されないとされているのである。

その一方で，インドはコンピューター技術者という点では世界の先端を行く事実があり，アメリカにおけるIT産業はインドの技術者により支えられている，とする見方もある。そうした先進的な高い技術力をもつと同時に，地方豪族のマハーラージャが現在でも都市を運営するなど極めて貧富の差が激しい現実もある。このように，最先端と古い枠組みが混成しつつ，ある秩序を作り上げているのがインドであるともいえるのであろう。

インドの集落形は混成形であるとした人がいる（住居集合論№4，鹿島出版会，1978）。たしかにインドには雑多な中に生活があり，都市があり，人がいる。多神教と多宗教。イスラム王朝の歴史とヒンドゥー教とが混成して存在し，それが不調和をなしていない。混成していながら，きしみ音が発生していず，むしろ興味深い共鳴音を発しているともいえるのである。

インド北部地域，特にヴァラナシにおいては聖な

る川ガンジスと都市が一体化した空間として，われわれの前に出現した。またプシュカルでは湖ではあるが，やはり聖なる水の空間と都市が融合し一体化しているのを観察できたことが，インドでの大きな成果であった。第16回調査のバリ島の場合，主たる宗教が同じヒンドゥー教でありながら，水の空間（バリ島では海）が不浄の空間として位置づけられていたのはどうしてであろうか。

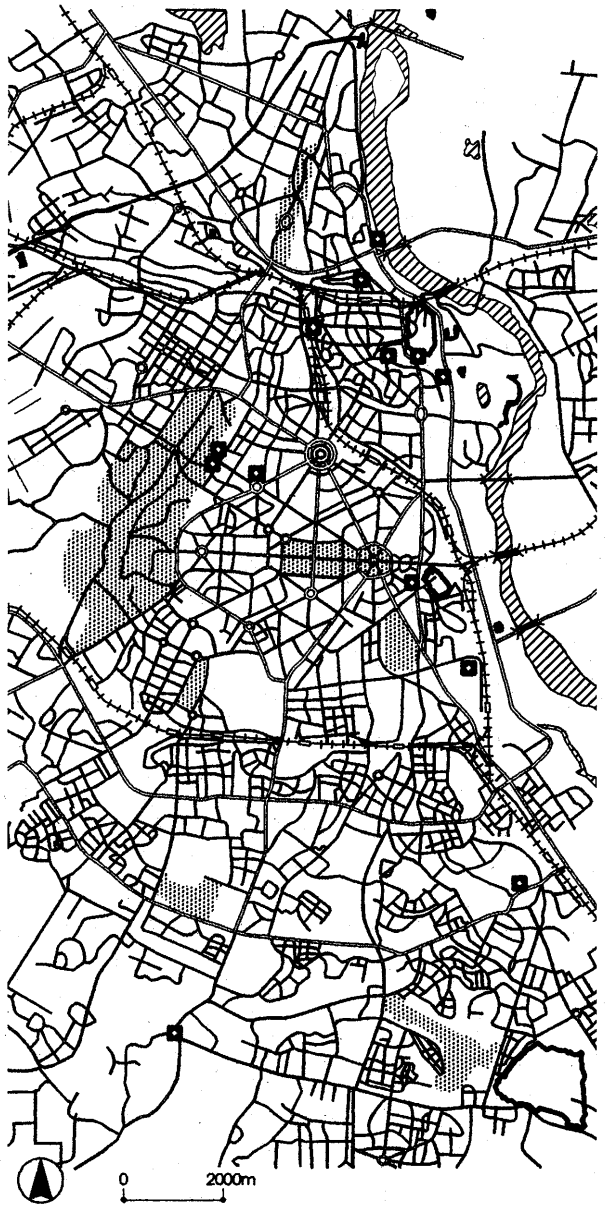
いずれにせよ聖なる領域が都市空間にしっかりと位置づけられており，その他の空間は混成形を基本として混沌とした多要素，異種空間の混成・融合などで表現できる世界が広がっているのがインドではなかろうか。人種的，宗教的，言語的にも，また生活基盤としての風土的にも多要素の上に成り立ちながらも，それが複合しインド特有の魅力として醸し出されているのが「インド的」ということであろう。

さてインド調査における目的のひとつである，インドにおける広場概念とは，という問いに対する答を探さねばならない。10の都市における調査を経験し，何がいえるかを考えてみた。まず，「閾（しきい）」と「結界」という目をもってインドの都市を追ってみよう。聖なる山，聖なる川，その空間に対して生活的な俗なるものを区別するという態度が見られる。聖なる空間はひとつの領域としてしっかり結界を結び，そこに踏み入ることは重要な行為であるため，閾という空間を明確につくることがインドの都市のあり方ではなかろうか。俗なる領域があらゆる要素の混沌とした混成だとするなら，それとは異なる聖なる領域に踏み入ったとき，人々は安息の境地に到達し，新たなエネルギーを得て，再び俗なる領域へと戻っていけるのであろう。これこそインドにおける広場概念の形態なのではないか，というのが現在までに得られたひとつの答である。たとえば，ヴァラナシにおいて聖なるガンジスに身をゆだねるためには，聖と俗とをしきる閾を越えねばならない。調査した10の都市それぞれで，その閾と結界の構成は異なっている。都市の中での閾と結界を読みとくことがインドの都市を理解するひとつの方法と思われる。

（8）インド北部地域都市の概要

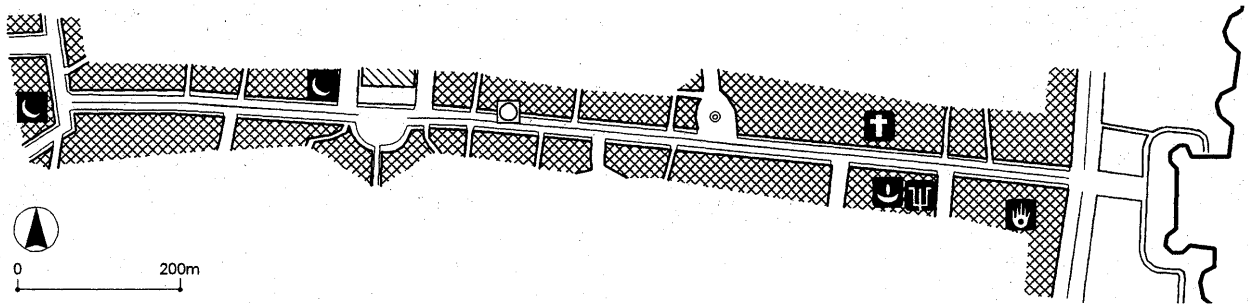
Delhi

デリー
IND-05-001

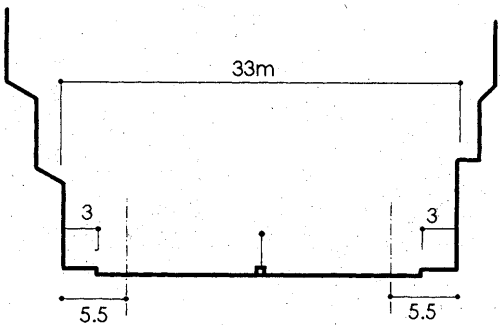


図－4　デリー都市図

デリーはインドの首都であり，北インドの玄関口でもある。この都市はラール・キラーを中心としたオールド・デリー，コンノート・プレースを中心としたニュー・デリー，そしてプラナ・キラーの三つの地区により形成されている。ヤムナー川の西岸に位置するこの都市は12世紀，この地に首都をおいたデリー・スルタン朝の下で発達した。17世紀，ムガ

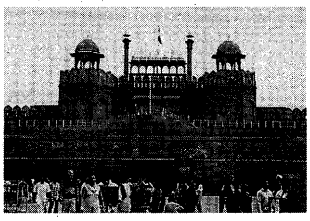


図－5　チャンドニー・チョウク通り図

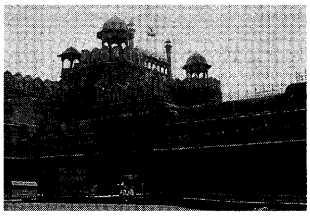


日曜日には市の範囲が道路に張り出す

図－6　チャンドニー・チョウク断面図



写真－1　ラール・キラー正面



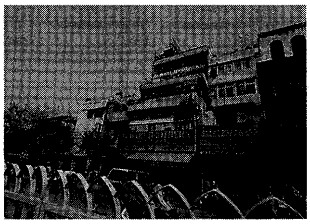
写真－2　城門入口

ル帝国時代の前半に都はアーグラーへ移っていたが，シャー・ジャハーンがラール・キラーを築き，続くアウラングゼーブ帝が再び都をデリーに戻した。

19世紀初め，インドは英国統治下に置かれ，首都はカルカタに移された。しかし，1911年に再びデリーに遷都され，都市計画のもとニュー・デリー建設が始まった。入り組んだ道が続くオールド・デリーとは対照的に道幅の広い整然とした道路網が広がっている。ニュー・デリーは1931年に完成し，道路はイギリス式の円形のロータリーで結ばれ，政府の機関や高級ホテルが集まり，一国の首都としての顔をみせている。現在は人口約1300万人（2001年）のインド第三の都市であり，アショカ王の時代からムガル朝の時代までの多くの歴史遺産と，近代的な高層建築が混在する複雑な町並みになっている。

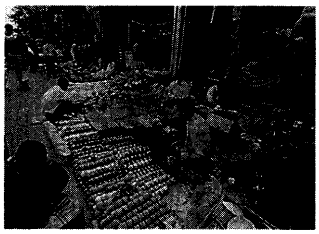
ニュー・デリーが完成して以来，街の中心として人々を集めてきたのが，コンノート・プレースである。直径200mほどの公園を，白い扇形の2階建ての建築群が二重に取り囲んでいる。周囲の建物はブロック分けされ，アルファベットによる表記がなされている。そこでは旅行代理店，書店，ホテル，レストランなど様々な商売が営まれている。

オールド・デリーにあるラール・キラーは17世紀前半ムガル帝国5代皇帝シャー・ジャハーンの治世に造られた王城である。それを起点にして，かつて3本の大通りが走っていた。そのひとつは城の南側に位置するデリー門からジャマー・マスジットに至る通りで，1857年のセポイの乱の際，バザールもろとも破壊された。二つ目の通りはデリー門から街の城壁へ南下した大通りで，現在こちらがバザールとなっている。そして三つ目はインドで最も有名なバザールのひとつであるチャンドニー・チョウク（CHANDNI CHOWK）である。通りはラール・キラーのラホール門から西に一直線に走っていて，かつては中央に水路が通っていた。チャンドニー・チョウクとは「月光の市」という意味で，人，車，リクシャー，牛などで絶えず混雑している。通りに面する建物は大半が4，5階建てで，1階部分が店舗になっており，その上部が住居という形である。

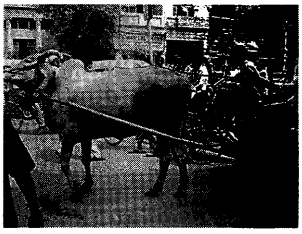


写真－3　チャンドニー・チョウクの町並み。

写真－4　チャンドニー・チョウクに面するシーク教寺院。

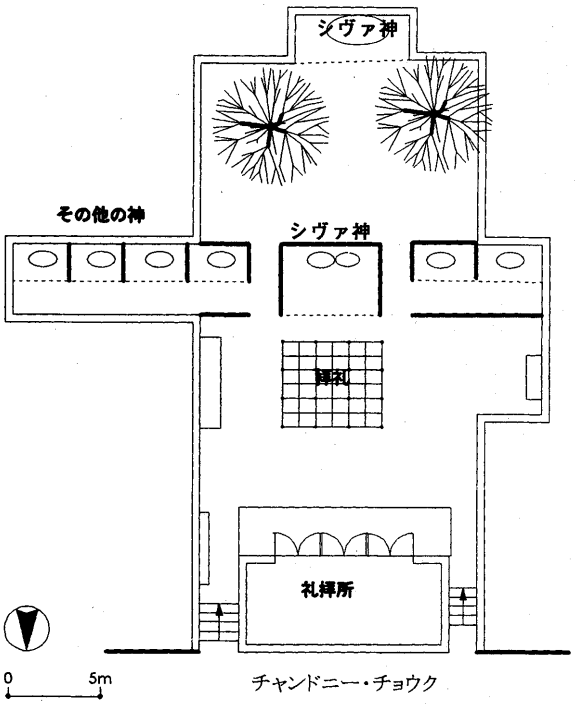


写真－5　日曜日は通りの店は閉まっており，代わりに露店が道の半分まで出ていた。



写真－6　通りを横切る牛。

ラール・キラーから西に200mほど行くと左にGAUR SHANKARという，シヴァ神を祀ったヒンドゥー教寺院がある。内陣に入るには靴を脱ぎ外の喧噪から離れ，気持ちを新たにしなければならない。寺院の2階部分が祈りの空間で，中央にシヴァ神とそのシンボルであるリンガムが，その左側に，何体かの神像が祀られている。そこに人々は花などを供える。この寺院の並びにシーク教の寺院もある。

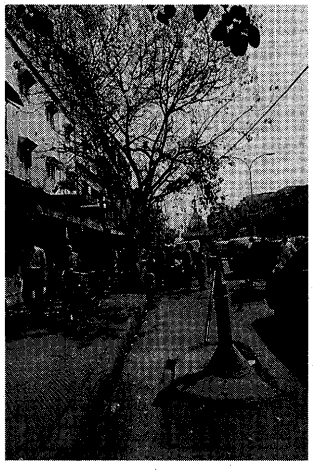


図－7　ヒンドゥー教寺院平面図

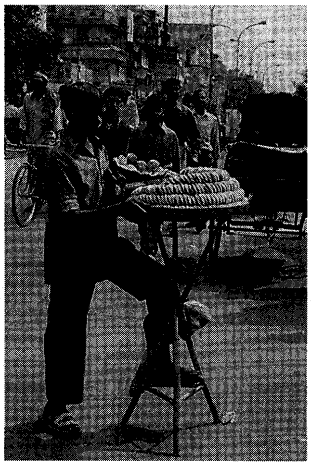
この通りを軸として，枝分かれして延びる通りや商業施設と共に一大商業エリアを形成している。それぞれの商業エリアは，市毎に扱う商品のジャンルがほぼ決まっている。市庁舎前から南に延びるNAI SARAK通りがあり，二つの通りに対して市庁舎は軸線を整えた配置となっている。この通りには本や

写真－7　市庁舎前の広場。

写真－8　チャンドニー・チョウクに直行する通り。



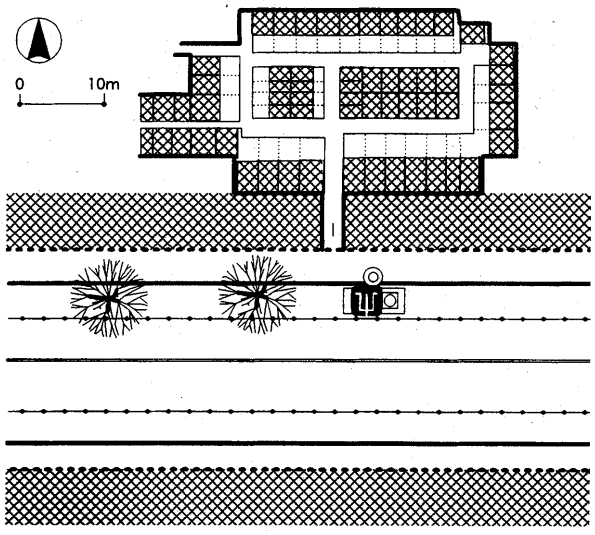
写真－9　道路に設置された井戸。奥にはハヌマーン・テンプルがある。



写真－10　道路に出て食べ物を売っている。移動しやすいように必要最小限の装備。

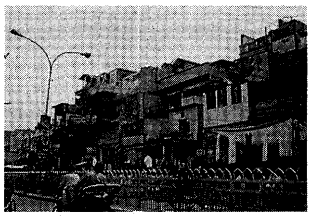
文具類の店が並ぶ。

またチャンドニー・チョウクに面してカトゥラと呼ばれる商業施設がいくつも並ぶ。ひとつのカトゥラで同業種の商人や職人が働いている。こうしたカトゥラのうち，布地の卸売り店が並ぶKATRA DHULIAを調査した。

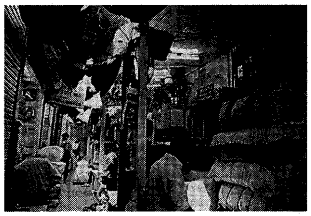


図－8　KATRA DHULIA 平面図

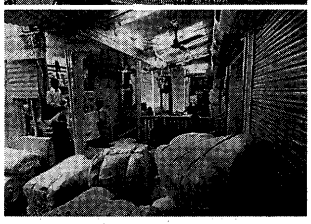
ここは78の店が軒を連ね，約80年前に現在のような形に形成された。店舗は1階のみで，2階以上はオフィスになっており，すべて賃貸である。奥が長く，長屋のような形状をしており，人々は手前のベランダで商品を陳列している。チャンドニー・チョウクに面する門はひとつで，閉店時は施錠される。



写真－11　チャンドニー・チョウク



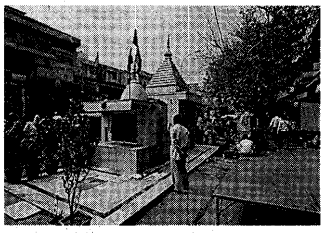
写真－12　KATRA DHULIAの内部。



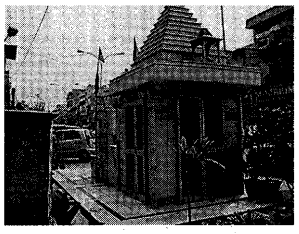
写真－13　商品が置かれている。

写真－14　2階へ上がる階段。

KATRA DHULIAの前の車道の一画にハヌマーン・テンプル（HANUMAN TENPLE）と呼ばれるヒンドゥー教の祠がある。通行人や，店を経営する人にとってひとつの心のよりどころとなっている。



写真－15　ハヌマーン・テンプルの正面。



写真－16　ハヌマーン・テンプルの裏。

チャンドニー・チョウクに並んでいる店や，そこから枝状に広がるこうした路地は，オールド・デリーの商業の中心であると同時に，人々の精神的な場としても中心となっている。それはラール・キラー向いのジャイナ教寺院から突き当たりのファテープリー・モスクまで，ヒンドゥー教やシーク教を含む各宗教の寺院やモスクが通りに面して並んでいることからもわかる。それらの宗教施設の中に一歩足を踏み入れると，外の喧噪や暑さを忘れさせるようなひんやりとした厳粛な空間が広がっており，ひとつの闕と結界が結ばれている空間となっていた。

2 Jodhpur　ジョードプル
IND-05-002

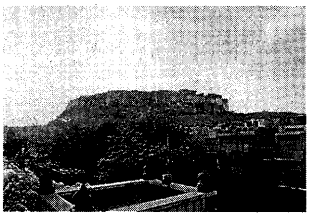
ジャイプルの西300kmに位置する。町の西側からパキスタン国境まで，タール砂漠が広がる。1459年に，ラージプートの一氏族，ラートール家のジョーダ王がワールマール王国の首都として造った。ジョードプルは「ジョーダの町」を意味する。インド北西部の典型的な城下町で，東西交易の要の町として栄えた。現在はジャイプルに次ぐラージャスターン州第2の都市である。人口は約84万6400人。

図－9　ジョードプル都市図

町は旧市街と，その東南に20世紀になって発展した新市街に分かれる。旧市街は8つの門を構えた10kmに及ぶ城壁に囲まれている。ほとんどの建物は青で統一され，“ブルーシティ”と呼ばれる。青色の

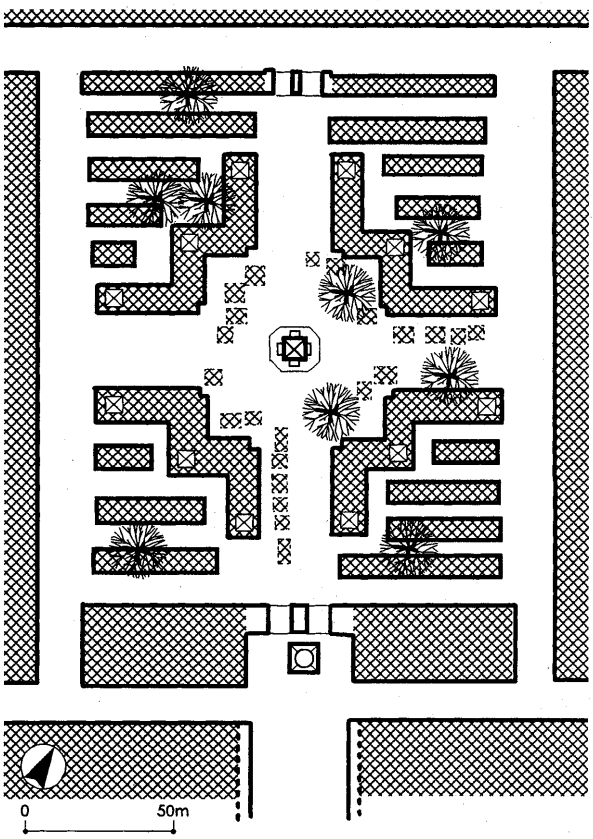
建物はバラモンの家を意味するが，今日ではバラモン以外の人々もこの習慣に習っている。また青色は，蚊を寄せ付けない効果があるとも考えられている。

町の北側には，130mの岩山の上に36mにも達する城壁をもつ荘厳なメヘランガル城がそびえる。これは，1459年にジョーダ王がジョードプルのシンボルとして建設した。この城は現在もマハーラージャが所有し，博物館として公開されている。隅が垂れたバンガルダール屋根のデザインを基調とした数多くの宮殿や寺院が中庭群を囲み連なっている。ここからはジョードプルの町が一望できる。



写真－17　時計塔市場から見たメヘランガル城。

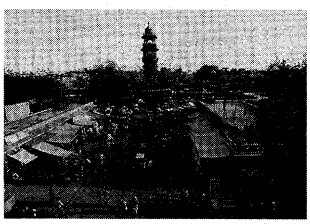
写真－18　高さ130mの岩山に建つ城。



図－10　時計塔市場広場図

町の中心には約200店舗の店がひしめく市場広場がある。350年前にマハーラージャがつくり，かつてはサダル・マーケットという名称であったが，35年前に時計塔市場（CLOCK TOWER MARKET）という名称に変わった。その名の通り，広場中央には時計塔があり，市場のシンボルとなっている。営業時間は朝の6時半から夜10時半。月曜は周辺の店は休みだが，市場は営業している。

写真－19　メヘランガル城のある丘から見た時計塔市場とNAI SARAK通り。



写真－20　活気あふれる時計塔市場。

広場の北と南には門があり，北側の門の脇には警察，南側の門の外側にはランチョール寺院がある。東側と西側には常設の市場施設があり，西側ではスパイス，野菜，塩，東側ではバングル，リサイクル品が売られている。高くなっている床の上に商品を並べ，そこに座り売買をする店，前面通路に陳列台を出し営業する店，客が中に入り商品を手に取ることのできる店など，形態は様々である。中央の時計塔周辺及び市場施設の間では，露店や地面に商品が並び，衣類，靴，生活雑貨などが売られている。それらの間を，オート・リクシャー，自転車，オートバイ，人，牛が行き交う。

写真－21　露店の間を人々が行き交う。

写真－22　通路に陳列台を出す店。

広場の北側には竹製品が売られるバンブー・マーケット，南側にはNAI SARAK通りがあり，広場と共に旧市街の中心を構成している。NAI SARAK通りは町のメインストリートであり，車の

交通量が多く，人通りも多い。布屋，食堂，電器店などが並び，夜半まで賑わいを見せる。南門外側のランチョール寺院により，閾が構成されている。

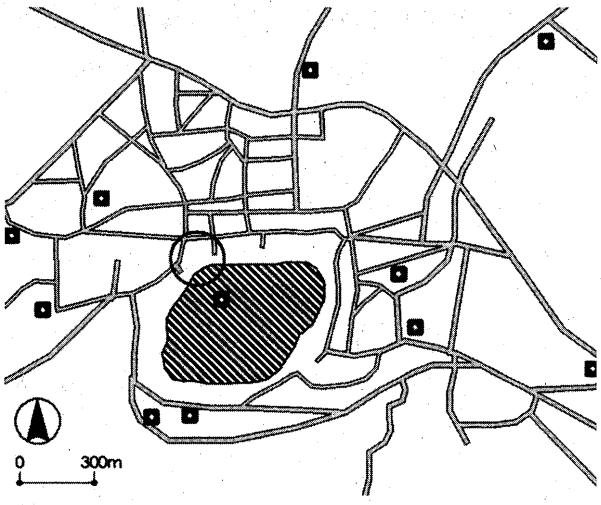
写真－23　バンブー・マーケットには竹製品が並ぶ。

写真－24　町のメインストリートNAI SARAK通り。

3 Pushkar

プシュカル
IND-05-003

アジュメールの西11kmに位置する，ヒンドゥー教の聖地。人口約1万5000人。町は52個のガートと白く塗られた建物に取り囲まれた聖なる湖，プシュカル湖を中心に構成されている。プシュカル湖は，創造の神ブラフマーが手にしていた蓮華の花弁が落ちた場所といわれ，町の名は花を意味する「pushpa」と手を意味する「kar」に由来する。敬虔なヒンドゥー教信者は少なくとも一生に一度はプシュカルへ巡礼をし，聖なるガートで身を清め，罪を洗い流す。毎年行われるラクダ市が有名で，市の開催時にはインド全土から約20万の人々が5万頭ものラクダや牛を連れ，プシュカルに集まる。

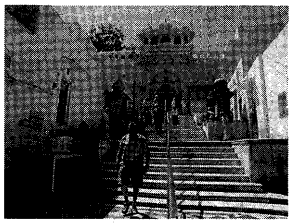


図－11　プシュカル都市図

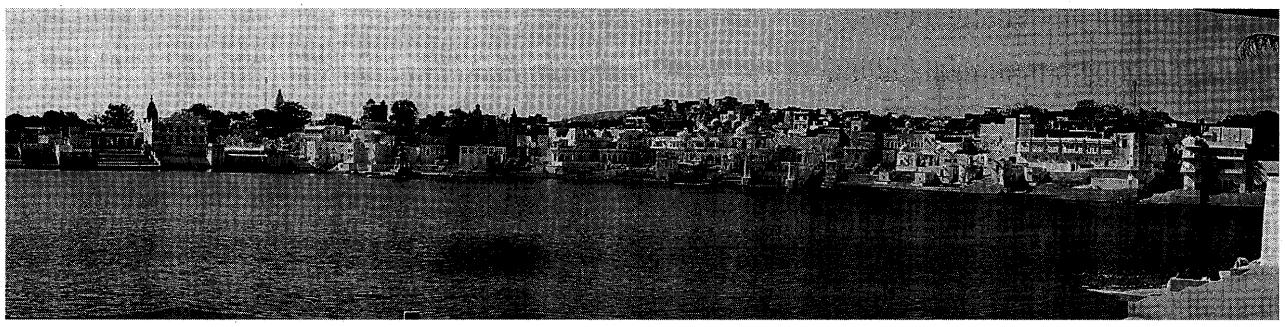
ガートの外側には，町のメインストリートであるサダル・バザールが通る。食料品，衣類，布製品，雑貨などの商店が軒を連ね，ところどころに果物，ジュース，土産物などの露店も見られた。これらの商業空間と，寺院やガートの入口といった宗教空間が混在し，観光客や巡礼者の集まる活気ある空間が広がっている。道幅は場所により様々であるが，それほど広くはない。しかし，通りに面する建物の多くは1階，もしくは2階建てのため圧迫感はなく，また，車が通ることもほとんどないため，歩行者中心の快適な空間となっている。

サダル・バザールの西端にはブラフマー寺院がある。赤い尖塔が特徴的なこの寺院は，ブラフマーを祭った数少ない寺院のひとつである。巡礼者はプシュカル湖で沐浴をした後ブラフマー寺院へ参詣する。

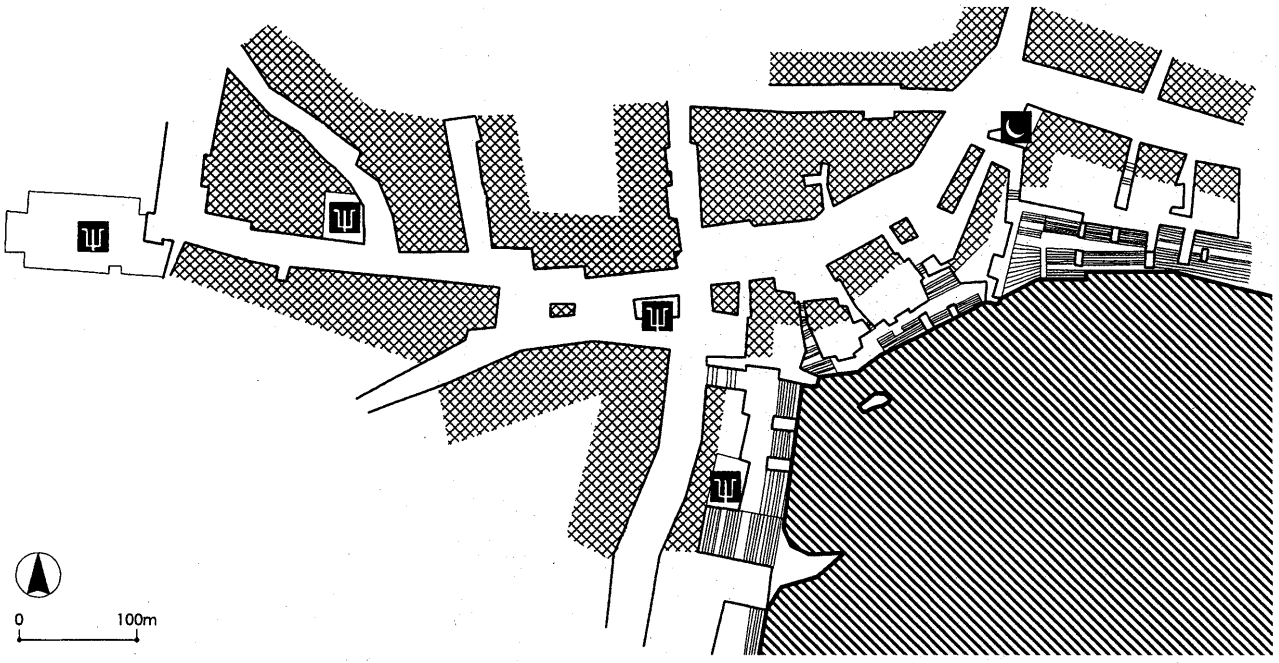
写真－25　町のメインストリート，サダル・バザール。



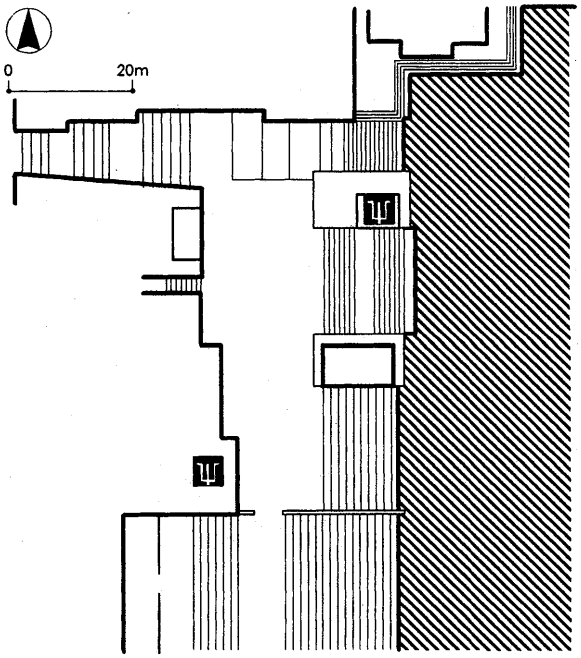
写真－26　ブラフマー寺院の入口。



写真－27　ガート，白い建物に取り囲まれたプシュカル湖。

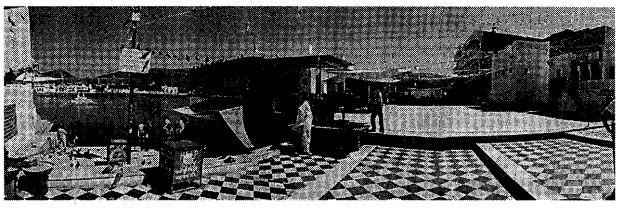


図－12　サダル・バザール通り図



図－13　ブラフマー・ガート周辺図

ヒンドゥー教では，聖地を意味するティルタ（tirtha）が元来「水辺」，「渡し場」を意味することからもわかるように，川や水辺空間が神聖視されている。水は物理的にも精神的にも身を清めるとされ，火葬した後に遺灰を川に流すと輪廻から解脱できるといわれている。ガートは，そうした聖なる水辺に接する場であると同時に，炊事，洗濯などにも利用



写真－28　ガート内の広場的空間。

される，生活空間でもある。

ガートの入口は通りに面して設けられ，下へ降りる階段が続く。階段の下には広場的空間があり，そこでは休息する人，露店を出し宗教関連品や土産物を売る人などが見られる。祭りの際には，儀式を行ったり，食事が振舞われる場としても使用される。広場には宗教関連施設や，さらに水辺へとつながる階段がある。その階段を下ると聖なる湖が広がる。それらが一体となり，ひとつの結界を構成している。通りに面するガートの入口は，門のあるなしにかかわらず，聖なる領域への閾となっている。閾を越え，湖に近づくに従って，徐々に神聖度が強まってゆく構成となっている。

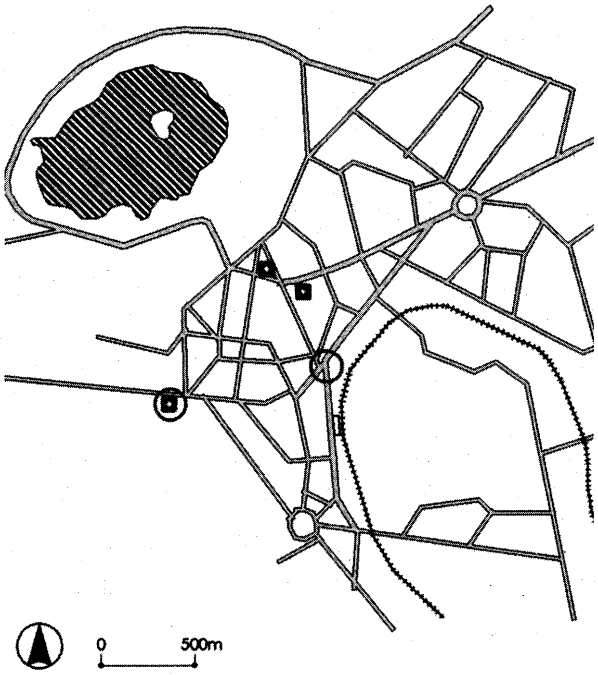
調査を行ったガートは，湖の西側に位置する。ガート内の水辺への階段は北からそれぞれブラフマー・ガート，サヴィトリ・ガート，PASHURAM ガート，INDRA ガートと呼ばれる。周囲には，ゲストハウスや寺院，その他宗教関連施設が並ぶ。サヴィ

トリ・ガートとPASHURAMガートの間には，巡礼者の休憩や着替えのための施設があり，そこにある階段を降りると，現在は使われていないが，王の妻のための沐浴場がある。PASHURAMガートは，荼毘にふした後に散骨する場となっている。サヴィトリ・ガートの向かい側の建物を2階へ上がるとCHARETIと呼ばれる施設があり，寄進を行う，祭りの際に食事を施すなどの宗教関連の事務局となっている。市場通りと異なり，ガートの空間は白壁で統一され水辺に降りる空間が町の喧噪とは全く異なる空間として構成されている。

4 Ajmer アジュメール

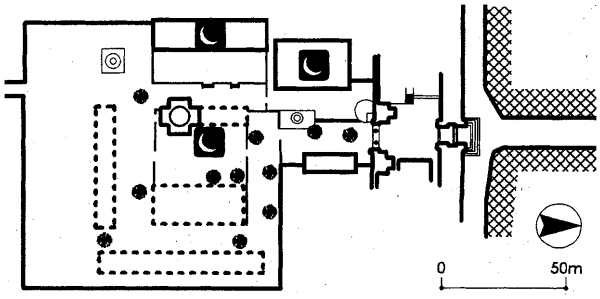
IND-05-004, IND-05-005

アジュメールは，大きな人造湖アナ・サガール（ANA SAGAR）の東南に面して広がる町である。アナ・サガールは12世紀の造成以来，水源として，また見晴らしのよい散策地として機能している。この静かな湖畔とは対照的に市街は多くの人や車で賑わっている。市街地は，直径1㎞にも満たない小規模な旧市街と，旧市街の東側にある鉄道駅の前から南北へ延びる大通りを中心に広がる新市街からなる。



図－14　アジュメール都市図

旧市街は三つの門とそれをつなぐバザールによりその骨格を成しており，そのほぼ中央に，ムガル帝国第3代皇帝であるアクバル帝が1570年に建設した宮殿，アクバル宮殿が位置する。またバザールの奥には，スーフィーの聖人，クワージャー・ムイヌッディーン・チシュティー（KHWAJA MU' INUDDIN CHISHTI）の廟であるダルガーがある。このダルガーへはアクバル帝もアーグラーから毎年巡礼に訪れており，インドにおけるイスラム教徒の重要な巡礼地である。いずれもアジュメールがイスラム教色の濃い都市であることを物語っている。現在アクバル宮殿は，州立博物館として利用されており，バザールからは少し奥まっているため，静かな一画となっている。



図－15　ダルガー平面図

一方，ダルガーは現在も多くの参拝者で賑わいを見せている。特に金曜の昼は参拝者の数が多く，周辺のバザールと共に活気ある空間を形成している。

町の三つの門のひとつ，デリー門からダルガー・バザールを南へ進むと，その突き当りにダルガーのメインゲートが位置する。ここに靴を預けて中へ入ると，ひとつ目の中庭右手にアクバル帝が建てたモスクがある。さらにBULAND DARWAZAという二つ目の門をくぐると，大きな鉄釜のある中庭へ出る。調査時には，この中庭の屋根付きの水場周辺やMEHFIL KHANAと呼ばれる礼拝所の前で人々がくつろぎ，神聖なる厳かな空間というよりは，人々が憩うための日常的な広場といった雰囲気であった。鉄釜は直径3ｍもある巨大なもので広場に二つある。聖人の命日“ウルス”（URS）の際など，数え切れないほどの巡礼者が集まると，その食事などにこの鉄の大釜が使われる。

写真－29　ダルガーの中心。クワージャー・ムイヌッディーン・チシュティーの聖廟前。

写真－30　ダルガーの中庭。中央奥の水場の後ろに聖廟の白いドームが見える。

写真－31　ダルガーの二つ目の門と中庭。左のテントの下に鉄釜がある。

写真－32　ダルガー・バザール。奥中央はダルガーのメインゲート。

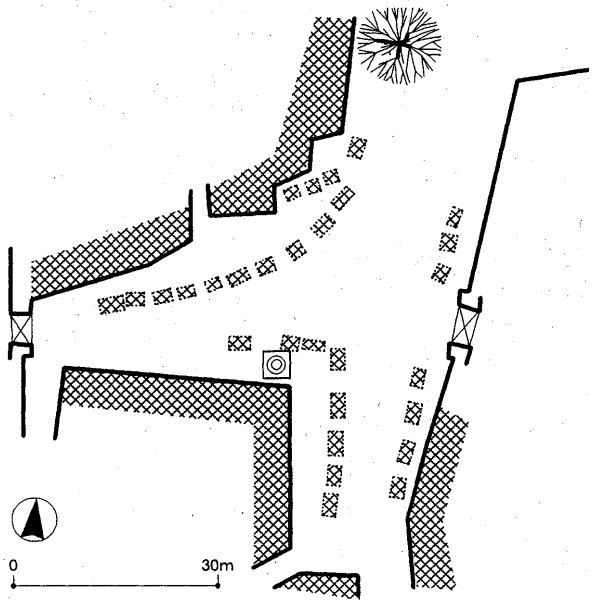
この広場奥の門をくぐると中庭に白いドームをもつ聖人廟がある。廟の中だけでなく中庭の思い思いの場所で人々は佇み，祈りを奉げたり，休息をとったりしている。廟に祭られているクワージャー・ムイヌッディーン・チシュティーは1192年にペルシャからアジュメールに来て，1233年までここで暮らしたスーフィーの聖人である。

この廟の西側にはシャー・ジャハーンが建てた白い大理石のモスクがある。こちらは廟の周辺とは異なり，モスク前の中庭にはほとんど人が見えず，内部で祈りを奉げる人の姿があり，神聖な雰囲気がかもし出されていた。これらの二つの大きな建物の奥にさらに広い中庭が続く。ウルスの際の巡礼者の規模を考えると狭い空間になるのかもしれないが，調査時は，のんびりとした雰囲気の，ゆとりある空間の広がりに感じられた。

このようにダルガーには，聖人の廟だけでなく，モスクをはじめとする施設と中庭の空間が複合的に配置されている。また，そうした施設の他に，メインゲートを含む8つの門があり，さらにダルガー内には約50の，周辺を含めると100あまりの店舗も付属している。これらの店舗の規模は小さく，聖廟の

写真－33　MADAR 門前の広場。

写真－34　MADAR 門前を行き交う露天商。



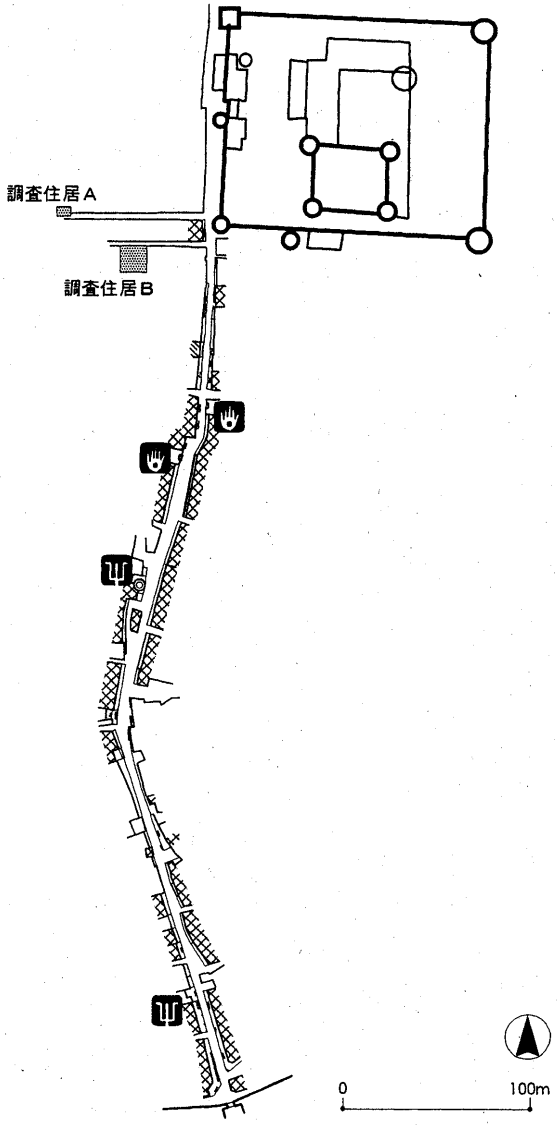
図－16　MADAR 門前の広場図

ポスターや本をはじめとする巡礼者のための土産物が売られている。

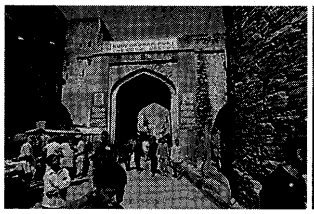
ダルガーは朝の5時半から夜9時半まで入場することができる。ダルガー門前から続く複数のバザールには，約500店が軒を連ね，火曜の半日以外は，朝9時から夜10時まで営業している，ということである。

ダルガーから東へバザールを抜けるとMADAR門へと抜ける。この門の外側は膨らみをもった広場であり，広場とその南側の通りには露店が並び，周辺の商店と共に賑わいを見せている。この周辺の商店は水曜が休みとなっている。ここからさらに東へ進むと鉄道駅へとつながり，城門前の広場から駅までは，人と車の往来が激しく，ダルガー周辺とは異なった喧噪が感じられる。

5 Roopangarh ルーパンガル
IND-05-006



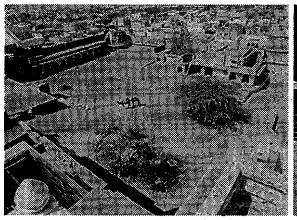
図－17　ルーパンガル通り図



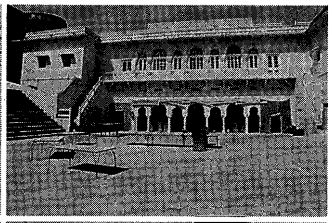
写真－35　メインストリートの端部には城門がある。

写真－36　暑い日ざしをさけるためテントが張られている。

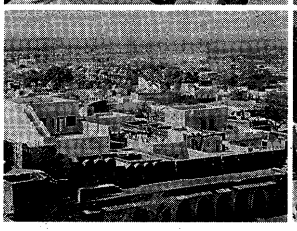
ラージャスターン州には多くの城塞都市が存在している。中でも今回の調査地であるジョードプルと，ジャイサルメールが有名である。このルーパンガルも二都市と較べ規模は小さいものの，人口1万2000人を擁する小さな集落レベルの城塞をもつ都市，小規模城塞都市といえるであろう。今では，城塞部分ではホテルが運営されており，文化的施設の維持保全が計られている。周辺地域では手工芸が盛んであり，皮革，織物，焼き物などが生産されている。



写真－37　城塞の庭は広く未整備のままである。

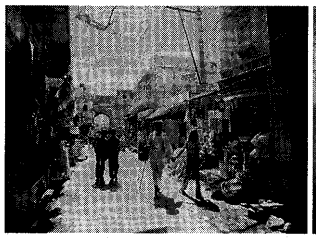


写真－38　城塞内の宮殿は旅行者の宿泊施設となっている。



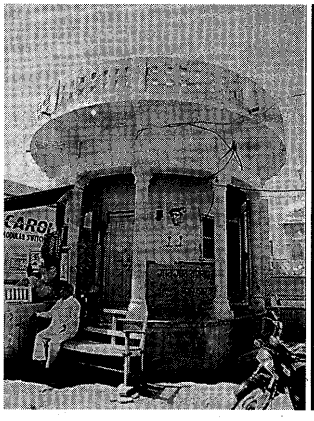
写真－39　ルーパンガルの町並みをのぞむことができる。

写真－40　高い窓なしの建物は武器庫として使用された。

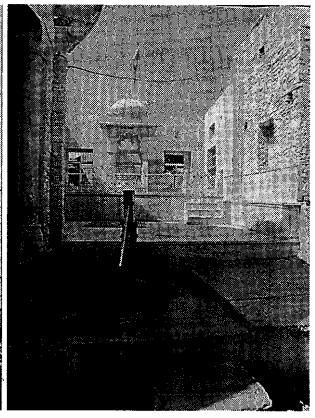


写真－41　メインストリートは人通りが絶えない。

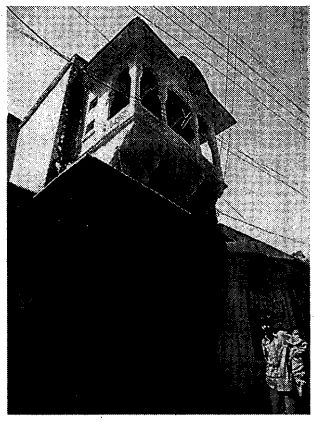
写真－42　物資の搬出入にはラバの荷車が使われている。



写真－43　メインストリート中央部の目立つレストラン。

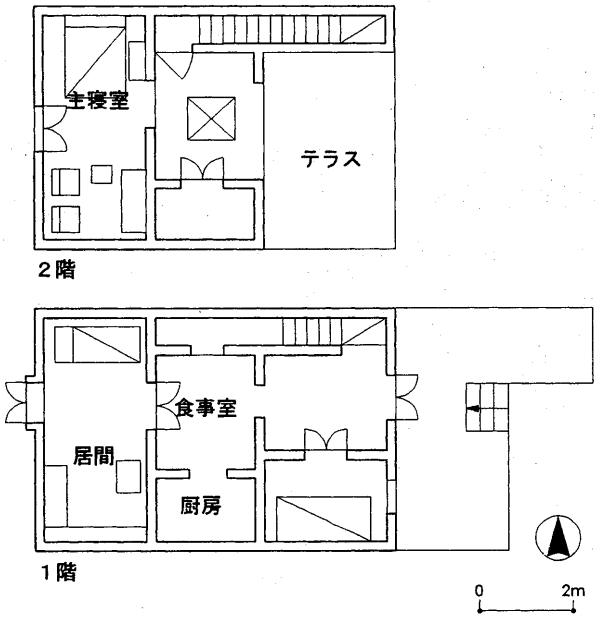


写真－44　レストランの奥にシヴァ神の寺がある。



写真－45　通りに面してジャイナ教の寺院がある。

写真－46　寺院の入口は装飾がなされている。

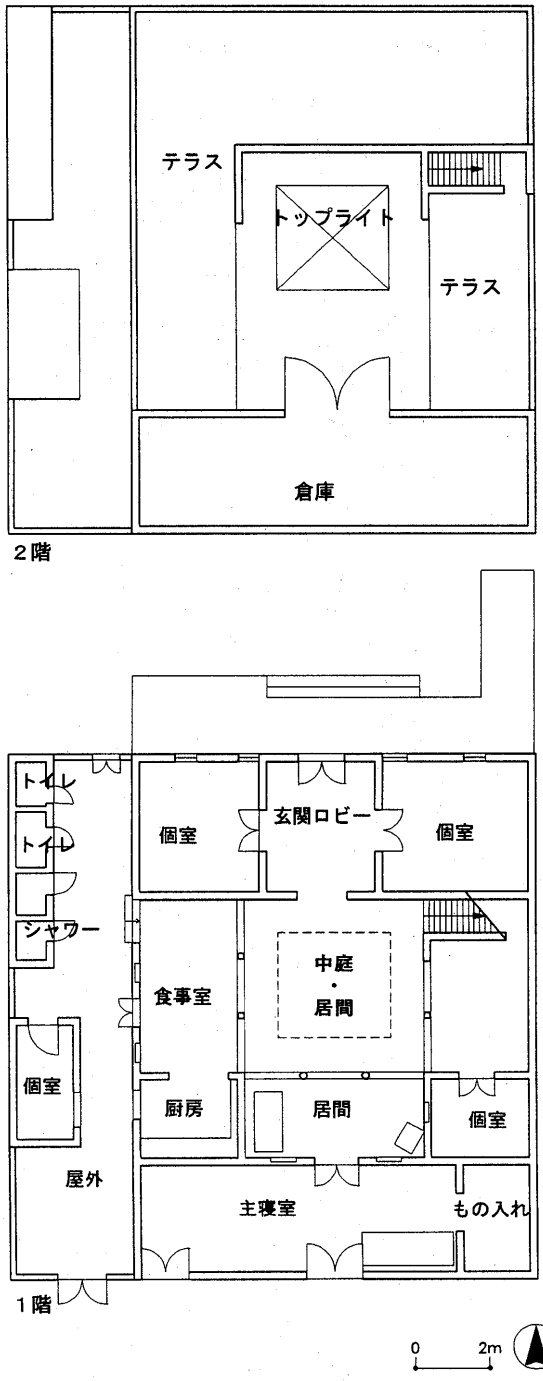


図－18　調査住居A平面図

写真－47　調査住居Aの入口部分。

写真－48　調査住居Aの2階からは城塞がのぞめる。

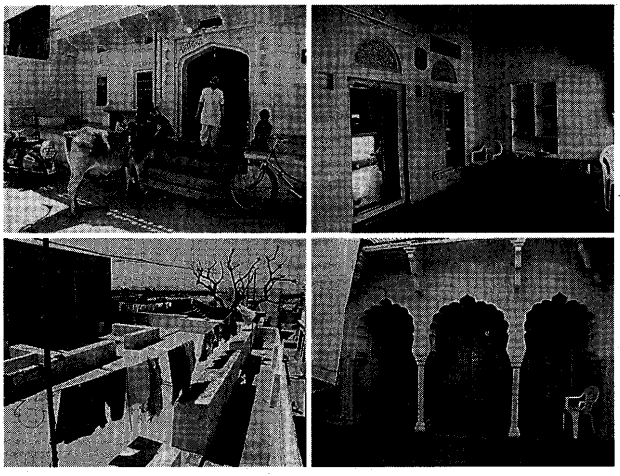
このルーパンガルはアジュメールの北約50kmにあり，17世紀の中頃マハーラージャ ROOP SINGH が建設したといわれている。かつては都市域の全体



図－19　調査住居B平面図

が城壁で囲まれていたようであるが，現在はいくつかの城門だけが残り，城壁の外側にもスプロールした集落の様子を見ることができる。

北側の城門LAL GATEを入り，まず城塞にアプローチして城塞の上から町全体を観察した。城塞から南に延びる道路が町のメインストリートであり，通りには商業施設や寺院，館，公共施設が配置され，



写真－49　調査住居Bの格式ある玄関入口。

写真－50　中央中庭に面して居間が配置されている。

写真－51　2階は倉庫と洗濯物干し場となっている。

写真－52　居間を囲む装飾的な柱組。

その南端には，メインゲートの城門がある。通りは約500mの長さで，中心道路空間として機能し，町の賑わいがあふれる空間である。つまり，町全体の中で，通り状の広場空間として機能している。

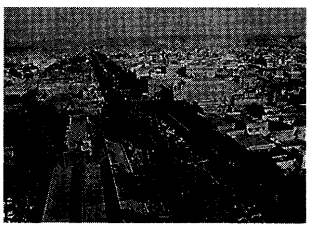
ルーパンガルには約12の寺院があり，メインストリートに沿っては三つのヒンドゥー教寺院と二つのジャイナ教寺院が位置し，郵便局，学校も配置され，全体に商業施設が連なっている。村役場と警察署は城壁の外に位置している。また，住居も配置されているが，大規模な邸宅と小規模なものとが混在している。城塞に近い地区でA，B二つの住居を調査した。ひとつは5人の家族が住まう，小規模な都市型住宅であり（A，図－18），ひとつは15人の大家族が居住する，築50年の邸宅である（B，図－19）。

6 Jaipur

ジャイプル
IND-05-007

図－20　ジャイプル都市図

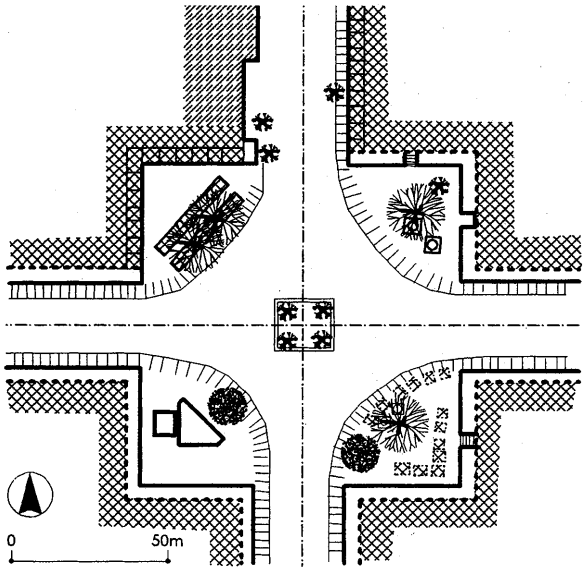
ラージャスターン州の州都ジャイプルは，1727年にマハーラージャ，ジャイ・シン2世（JAI SINGH II）が建設を開始した町である。ジャイプルという町の名は建設者にちなんで「ジャイの都市」の意味をもつ。城壁で囲まれた旧市街は大きく9つのブロックに分けられ，ブロックを区切る大通りもブロック内の道もほぼグリッド状に南北方向，あるいは東西方向へ延びている。1729年に市壁，市門といった都市の外形は完成した。市門は8カ所ある。



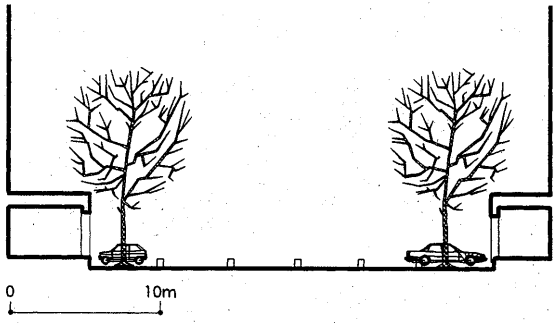
写真－53 町の東西軸をなすメインストリート。

写真－54 バリ・チョウパルを風の宮殿から見下ろす。

旧市街のメインストリートとなるラージ・パータ（王道）はスーラージ・ポール（SURAJ POL）とチャーンド・ポール（CHAND POL）と呼ばれる二つの門を東西に結ぶ大通りであり，この通りが都市の軸となり街区及び街路網が配置されている。この王道を4分割する形でチョウパルと呼ばれる三つの広場が1734年に西から順にチョッティ・チョウパル（CHOTI CHAUPAR），バリ・チョウパル（BADI CHAUPAR），ラムガンジ・チョウパル（RAMGANJ CHAUPAR）とほぼ等間隔に建設された。



図－21 バリ・チョウパル平面図



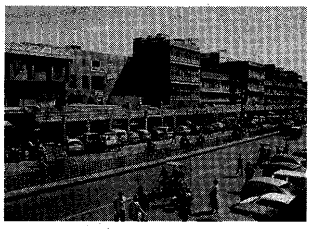
図－22 ジョハリ・バザール通り断面図

写真－55 バリ・チョウパルの交差点部分。

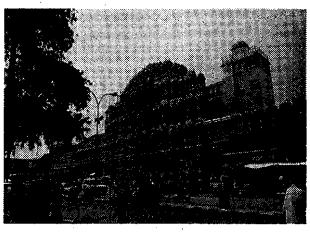
写真－56 広場の一隅。大きな木の下に露店が並ぶ。

バリ・チョウパルは「大広場」の意味をもち，長い王道のほぼ中央に位置する。バリ・チョウパルの北西ブロックには王宮があり，広場に面した賑やかな商店街をはじめ，2階や少し奥まった部分にヒンドゥー寺院や警察，高校といった様々な施設が見られ，まさに都市の中心といえる。

チョウパルは一辺が100m強の正方形の形態をとっている。東西に延びる王道は広場を挟んで西側がトリポリア・バザール（TRIPOLIA BAZAAR），東側がラムガンジ・バザール（RAMGANJ BAZAAR）と呼ばれ，1階部分はアーケードの連なる商店街となっている。これに直行する形で南側がジョハリ・バザール（JOHARI BAZAAR），北側はシレデオリ・バザール（SIREDEORI BAZAAR）とこちらも商店街が続く。王道もこれに直行する大通りも幅が広く，ほとんどが車道であり，歩行者のためのスペースはごく一部であるが商店街が長く連続し，多くの人で賑わっている。チョウパルは大きな通りが交差しているため，広場は大きく4つに分断されている。広場の4つのコーナーそれぞれには大きな木と祠があり，その木陰には露天商が並ぶなど，それぞれのコーナーをうまく活用している。それが，交差点を行き交う車の喧噪とは対照的な空間をつくりだしている。



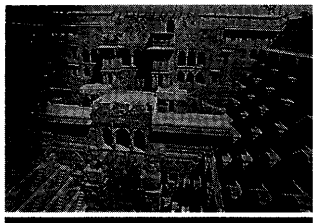
写真－57　アーケードの連なるジョハリ・バザール。

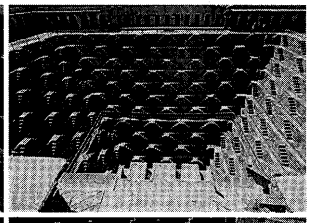


写真－58　風の宮殿ハワ・マハル

1853年，この王道の建物を統一してピンク色に塗ったことからジャイプルは“ピンクシティ”とも呼ばれている。王宮は，1726年に建造されたもので今もマハーラージャの住居として使われている。また，隣接する天文台ジャンタル・マンタルは1718年に建設が開始されたものである。ジャイプルの町を建設したジャイ・シン２世は天文学にも興味を示し，当時としては最大のこの天文台を建設した。

ジャンタル・マンタルの東側，バリ・チョウパルの北西に1799年に建設された，風の宮殿ハワ・マハル（HAWA MAHAL）が繁栄の象徴として建っている。この宮殿は，宮廷の女性たちが町の生活を見物できるように建てられたもので，装飾の施された５階建てのファサードが通りにそびえている。整然とした碁盤の目の道路網の中に，ハワ・マハルやジャンタル・マンタルなどの個性豊かな建造物が並び，またピンク色で統一されたアーケードのある商店街には色とりどりの商品が並ぶなど，混沌とした，かつ賑わいのある空間となっている。

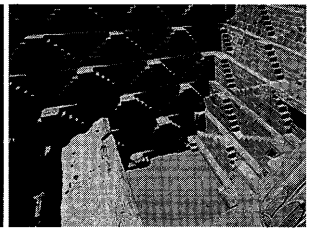




写真－59　クンダ正面には宮殿風に造られた部屋がある。

写真－60　11層におよぶ階段は幾何学的な美しさを示す。

写真－61　マハーラージャの部屋からクンダをのぞむ。



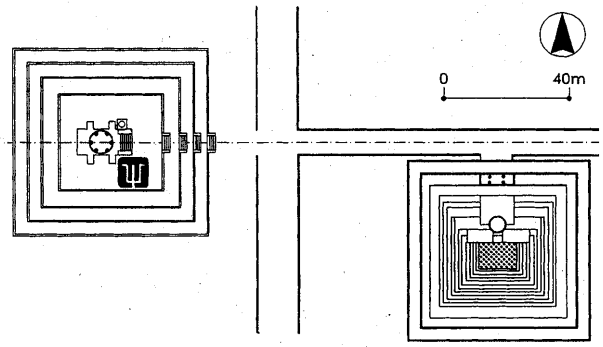
写真－62　階段の最下部に水面が見える。

アーバーネリーは，ジャイプルから約95km，アーグラーへと向かう途中の小さな村である。学校とクンダとその近くにある寺を中心とした小集落である。

インドは雨季と乾季が明確に分かれており，古来より，乾季に備え雨水を貯めておく貯水槽が数多く造られてきた。特に乾燥した西インドでは，造形的にも興味深いクンダが多く生み出されている。クンダとは，貯水槽の壁面が階段になっており，乾季において水嵩が少なくなった場合は，壁面の階段で低くなった水面まで下りてゆき，水をくむことができるというものである。クンダは，クンド（kund），バオリとも呼ばれる。

Abhaneri

アーバーネリー
IND-05-008



図－23　アーバーネリー・クンダ周辺図

写真－63　ハルシャ・マーター寺院

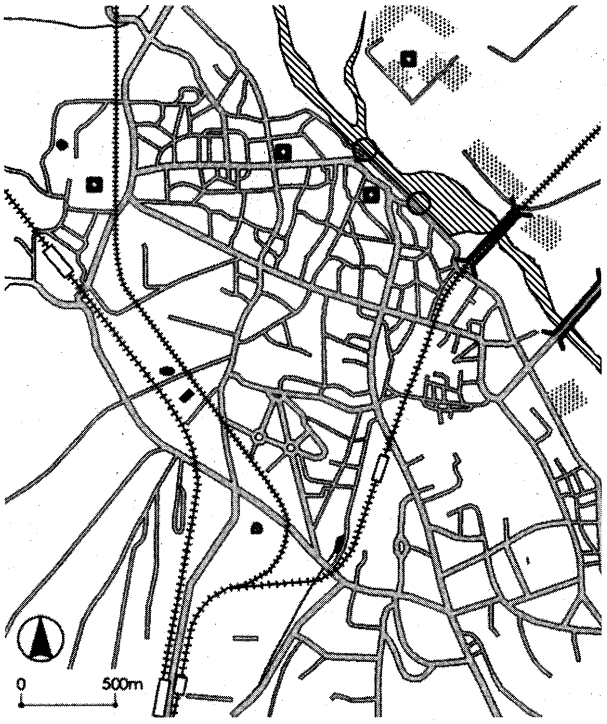
写真－64　ハルシャ・マーター寺院よりクンダの方向を見る。

アーバーネリーのこのクンダは，一辺が35m，深さ20mを超える11層からなる。一番深い層の左右には小祠堂があり，宗教的な儀式にも用いられていたと考えられている。ほぼ正方形のプランの三方が階

段で構成され，どんな水位にも対応できるようになっている。残る一方には部屋が積み重なり，全体で7層をなしている。この部屋はかつてマハーラージャが避暑のために使っていたもので，宮殿風に造られている。創建は9世紀と考えられ，下層の彫刻はプラティハーラ朝のものだが，上層にゆくほど後世の手が加わり，ムガル朝の連続アーチの柱廊で囲まれている。クンダから西側へゆくと，同じく9世紀創建のハルシャ・マーター寺院があり，クンダと関係があったといわれている。

写真－65 寺院の参道の軸線はクンダの入口に向かう。

写真－66 クンダと寺院の北東部に集落が広がる。



図－24 マトゥラー都市図

【8】Mathura マトゥラー

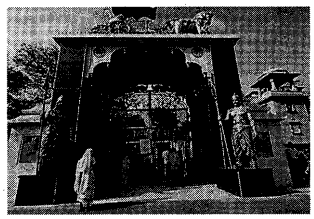
IND-05-009, IND-05-010

マトゥラーはインド北部，聖河ヤムナー川沿いに位置し，ウッタル・プラデーシュ州マトゥラー県の県都で，人口22万人を超える都市である。

歴史的には古くから東インドと北西インドを結ぶ北道と，デカン地方に至る南道の2大幹線が交差する交易の要衝であり，美しい仏像が有名なマトゥラー美術を創出した地でもある。

マトゥラーはクリシュナ生誕の地MUTTRAとされ，現在も隣接のヴリンダーヴァンと共にクリシュナ神話・信仰の聖地ブラジュ地方の中心都市である。

その中心となっているのが，クリシュナ生誕の地に建てられた，シュリー・クリシュナ・ジャンムブーミー（SHRI KRISHNA JANMBHOOMI）である。近年ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の対立により，入口では厳重なセキュリティチェックが行われているが，門の奥には8つの寺院の集合体があり，土産物屋や食堂，銀行といった都市機能を内包する施設である。近くには大規模なクンダもある。



写真－67 シュリー・クリシュナ・ジャンムブーミーの入口。

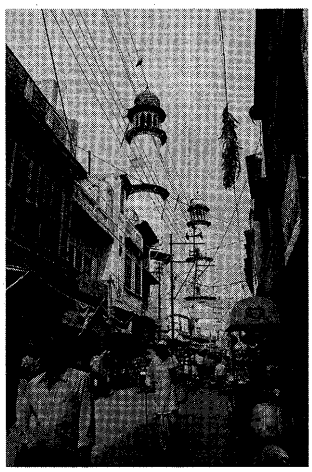
写真－68 シュリー・クリシュナ・ジャンムブーミー近くのクンダ。

このシュリー・クリシュナ・ジャンムブーミーとヤムナー川に挟まれて，マトゥラーの旧市街がある。旧市街は数本の主要な道路と網の目のような街路で構成され，その広い範囲がバザール空間となっている。四角い石が敷かれた通りは，物売り・リクシャー他行き交う人々で混雑している。日用品や衣類を売る店に混ざって，宗教施設付近では儀式用の供物を売る店も見られた。

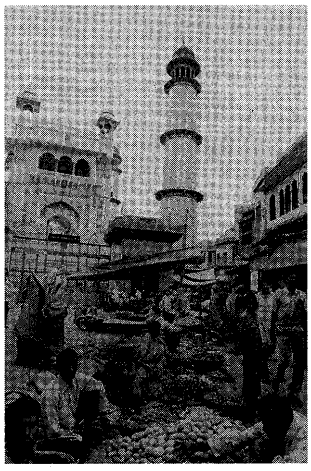
そうした雑踏の旧市街の中にあって，ジャマー・マスジッドの巨大なミナレットは，ひとつのランドマークとなっている。入口には鉄製の扉が設けられ，周囲より高い位置にモスクが置かれている。入口付近では野菜や果物が売られる露天市が開かれ人々で

写真－69　旧市街のバザール。日用品を売る店舗。

写真－70　1階が儀式用供物を売る店舗となっている。



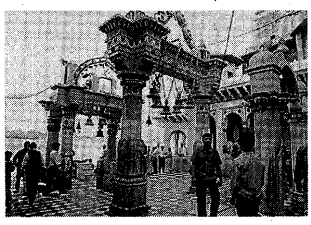
写真－71　旧市街のランドマーク，ジャマー・マスジットのミナレット。



写真－72　ジャマー・マスジット前では露天市が開かれていた。

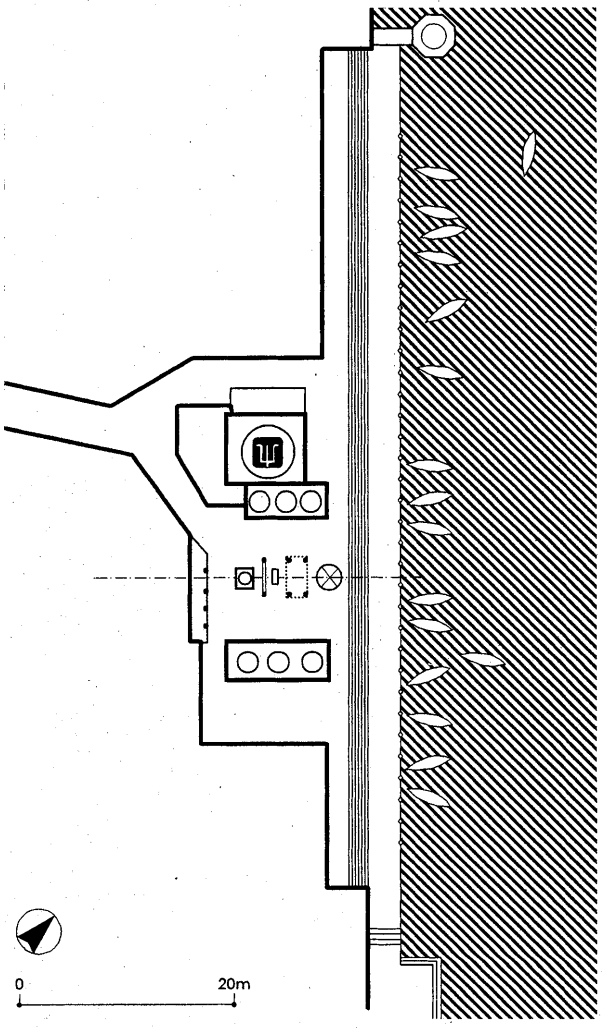
賑わっていた。

ヤムナー川沿いの，マトゥラーで最も重要なガートとされるヴィシュラム・ガート（VISHRAM GHAT）は，クリシュナがカンサ王を殺害した後に休んだ場所とされる。闕としての入口で靴を脱ぎ，ガートの中へ進むと広がりのある空間に出る。床は白と黒の大理石で市松模様が描かれ，周囲には宗教施設が並ぶ。三方を囲まれた広場的な空間である。さらに奥へ進むとヤムナー川へ降りる階段がある。水辺に向かって〈入口→広場→沐浴場〉と続く空間構成はヴァラナシやプシュカルで見たガートと同様であり，より聖なる空間へ向かって段階的に空間が構成されていることが観察できた。

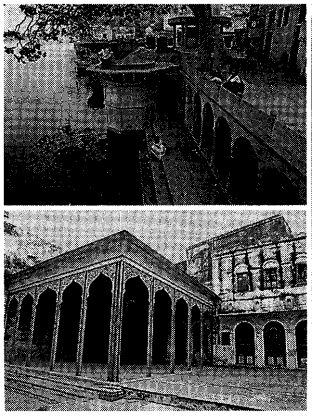


写真－73　ヴィシュラム・ガート内の広場的な空間。

写真－74　ヴィシュラム・ガートの沐浴場。

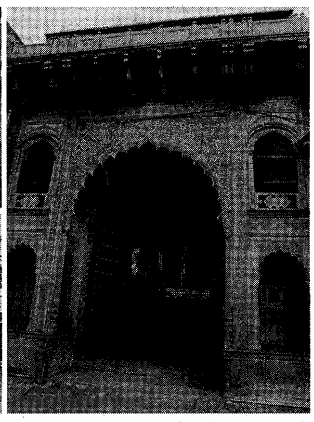


図－25　ヴィシュラム・ガート広場図



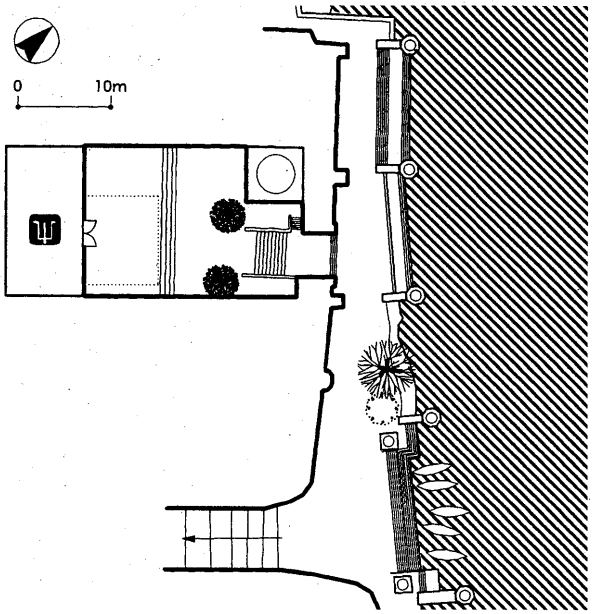
写真－75　NALLA ガート

写真－76　NALLA ガート近くの寺の中庭。



写真－77　NALLA ガート近くの寺の門。

一方，これより少し北に位置するNALLAガートは，川に沿って延びる細長い空間である。沐浴場に沿っていくつかの施設が直列状に並ぶが，前者のような広がりをもつ空間は無く，明確な段階的空間構成は見られなかった。しかし，沐浴場に面して立派な門構えをもつ寺があり，その中庭が広がりをもつ空間であった。宗教施設が，独立した形態のガートの事例である。



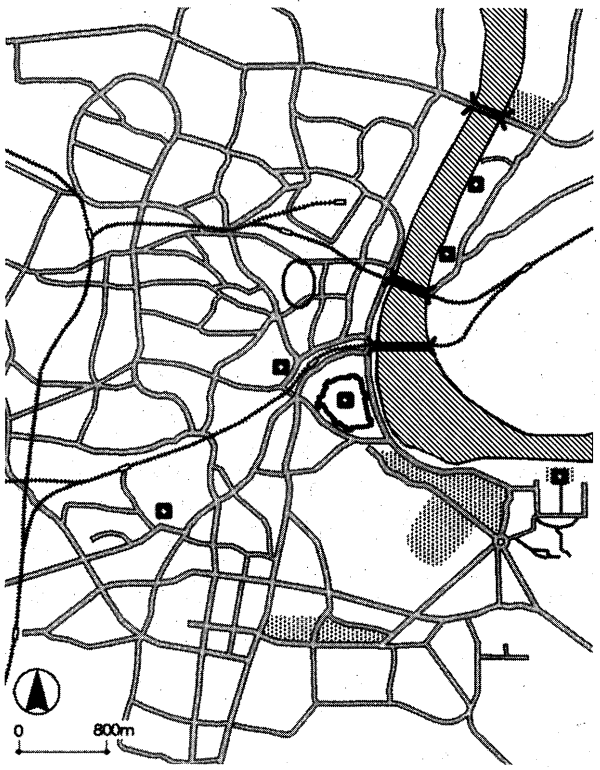
図－26　NALLA ガート広場図

9 Agra

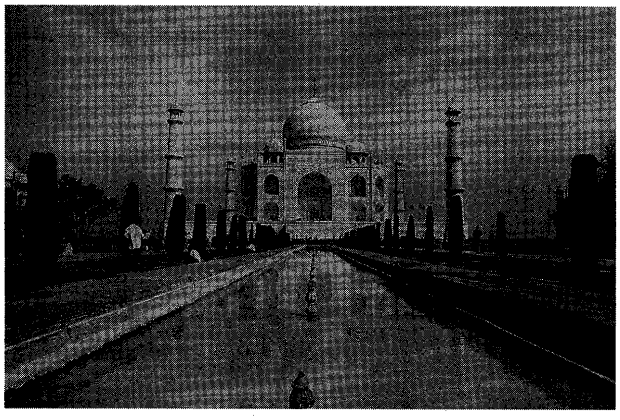
アーグラー
IND-05-011

アーグラーはインド北部，ウッタル・プラデーシュ州西端の都市で，アーグラー県の県都である。その歴史は古く，「マハーバーラタ」には紀元前3世紀の都市AGREBANAとして登場，またプトレマイオスの世界地図にもAGARAとして記されている。16世紀の半ばには，ムガル帝国第3代皇帝アクバルがアーグラーに首都を置き，以後約1世紀の間，帝国の中心都市として繁栄した。この時代に，第5代皇帝シャー・ジャハーンがその愛妃のために建立したタージ・マハルも建造されている。タージ・マハルは1632年から22年の歳月を要して建立されたイスラム墓廟建築である。

インド独立後は，アーグラーは工業都市として発展したが，現在は，深刻な大気汚染が社会問題となっている。



図－27　アーグラー都市図

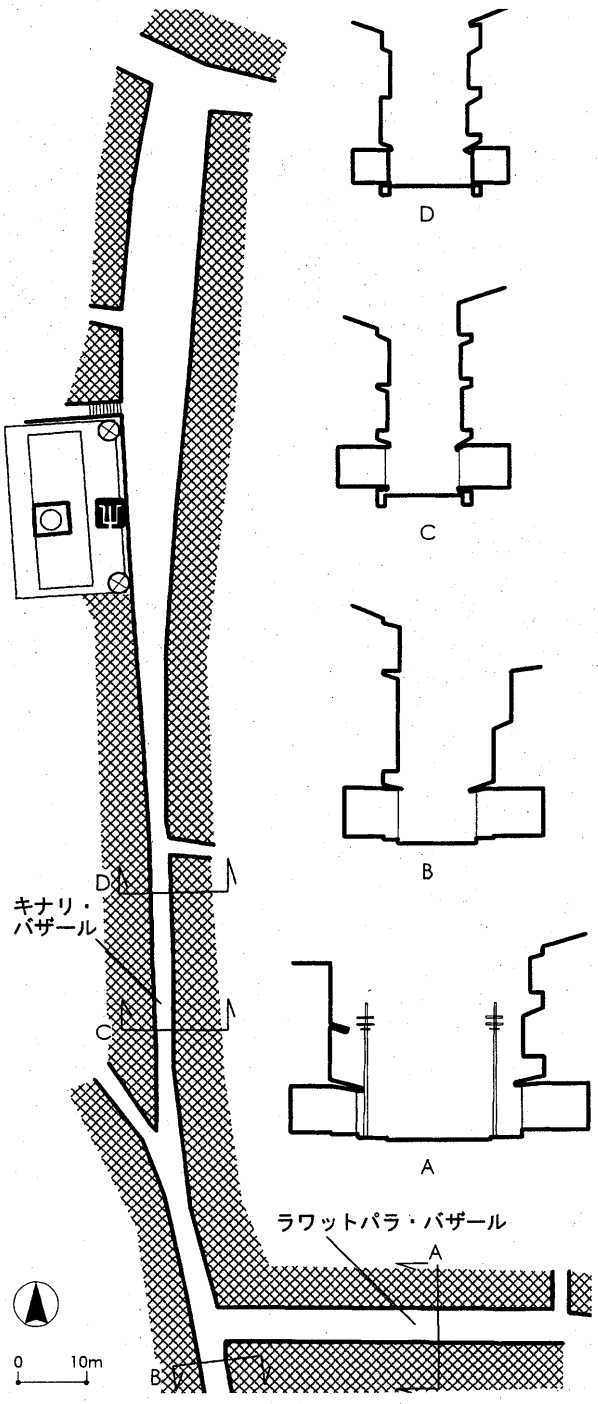


写真－78　タージ・マハル

現在タージ・マハルと並ぶアーグラーの観光ポイントであるアーグラー城は，アクバル帝により軍事目的で建設された。その後シャー・ジャハーンの代に宮殿とされ，最終的にはそのシャー・ジャハーン自身が幽閉されることとなった場所である。

写真－79　赤砂岩でできたアーグラー城の城壁。

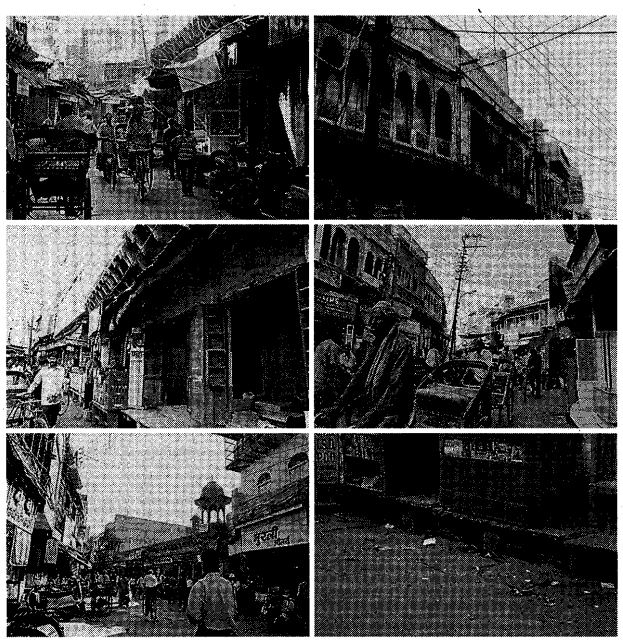
写真－80　アーグラー城内部



図－28　キナリ・バザール周辺通り図及び断面図

このアーグラー城の北側旧市街には，いくつものバザールが続く。緩やかにカーブした通りは１本の通りが二股に分かれ，また別の通りと合流し，全体として複雑な網目状の道路網を構成する。

キナリ・バザールはそうした旧市街の中にある歴史の古い市場である。バザール内の建物の上階部分が通りに張り出し，バルコニーが設けられている。建物には統一した細工が施された部分もあり，町並みとして統一感がある。また店舗床面は，道路面より一段高くなっており，道路との境には側溝が設けられている。そうした側溝に路面のゴミや埃を掃き捨てている人の姿が見られた。キナリ・バザール内の店舗の種類は，香辛料や食料品を扱う店から，衣類や日用品，携帯電話や家電製品を売る店など様々な種類が混在する。自転車，リクシャー，物売り，多くの人が行き交い活気あふれる空間となっている。



写真－81　旧市街。自転車，リクシャーが行き交う。

写真－82　建物の上階が通りに張り出している。

写真－83　バザールの店舗。

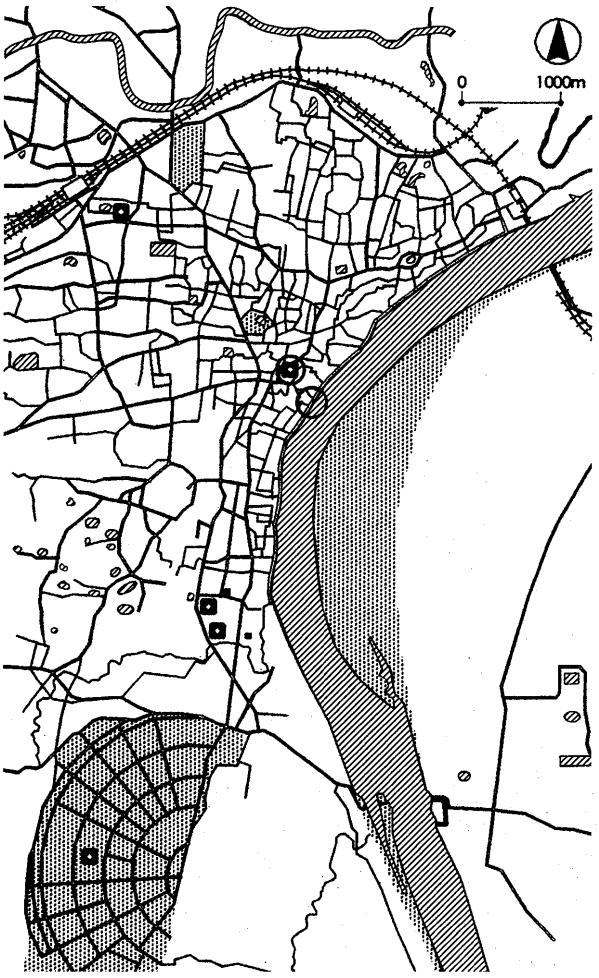
写真－84　旧市街の通りは緩やかなカーブを描く。

写真－85　バザールの中にあるモスク。

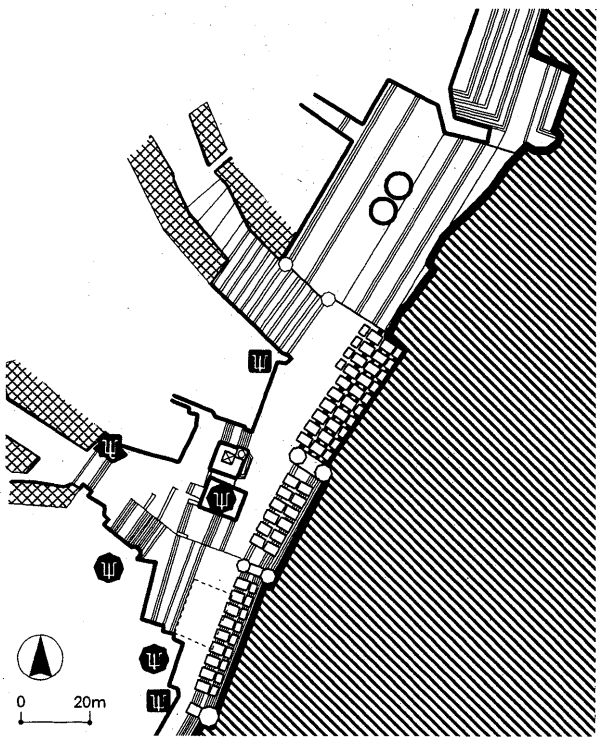
写真－86　通りと店舗の境界には側溝が掘られている。

10 Varanasi ヴァラナシ

IND-05-012 , IND-05-013



図－29　ヴァラナシ都市図



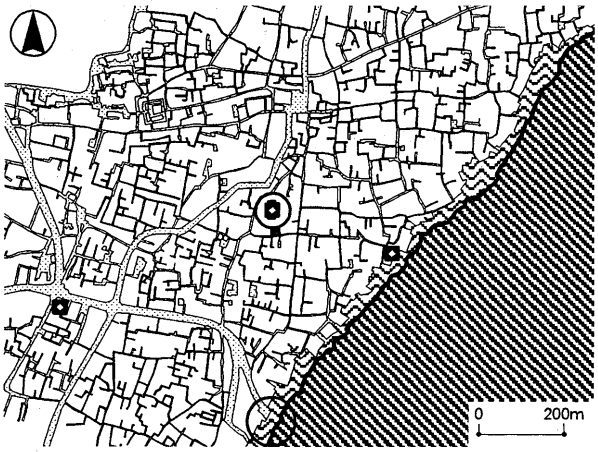
図－31　ダシャーシュワメード・ガート周辺広場図

写真－87　ダシャーシュワメード・ガート全景

写真－88　ガート入口部の階段をのぞむ。

写真－89　ガート中央のイベント広場。

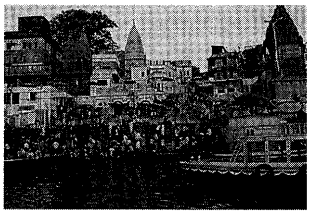
写真－90　階段は水位の変動を吸収する装置である。



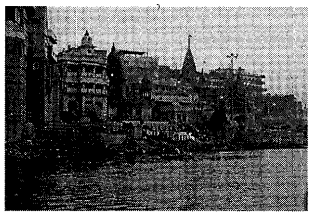
図－30　ヴァラナシ旧市街図

聖なる川ガンジスのほとりに位置する都市ヴァラナシは，ヒンドゥー教の聖地であると同時に仏教の聖地でもある。ガンジス川はヴァラナシに接する付近でその流れを南から北へと変えるが，その左岸に発達した都市がヴァラナシである。そうした位置にあるため，訪れた人はガンジス川を前にすると，東を向くこととなり，早朝であれば昇る朝日を見ることができる。

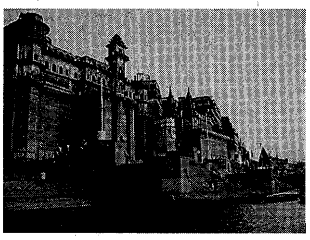
ガンジス川に接するヴァラナシにとって，聖なる空間の結界はガンジス川自体といえるが，都市域に限った場合，約5㎞におよぶガート部分が聖域といえる。その巨大なガートは聖なる空間であり，かつ，取水・排水など都市における重要な生活空間としても機能している。つまり，人々にとってガンジス川は祈りの場であり，同時に洗濯場であり，子供たちのレクリエーションの場でもある空間なのである。実際ガートでは，体や髪を洗う人々の姿や，遊び戯れる子供たち，洗濯をして岸辺に干すなど，生活空間としての要素も数多く見られた。



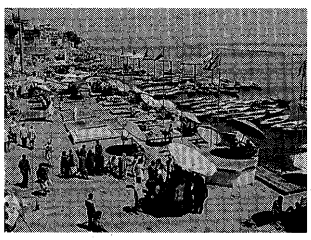
写真－91　寺院が並ぶダシャーシュワメード・ガート。



写真－92　マニカルニカ・ガートでは荼毘の煙が絶えない。

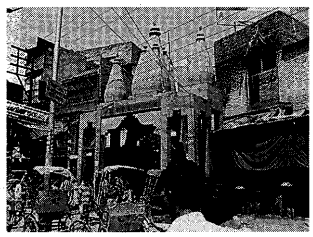


写真－93　ガートにはそれぞれ区切りをつける装置がある。



写真－94　強い日ざしをさけるパラソルが並ぶガート。

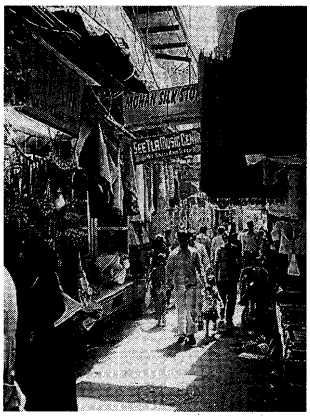
ヴァラナシの旧市街には，ガンジス川以外にも聖地としての要素が点在している。たとえば，最も重要なヒンドゥー教の寺院といわれるヴィシュワナート寺院（通称，黄金の寺）がある。その黄金の寺に向かう小路はヴィシュワナート小路と呼ばれ，重要な巡礼路となっている。その小道には各種土産物屋がひしめき合い，市場空間となっている。市内には1500近いヒンドゥー教寺院と，270以上のモスクがあるといわれており，ガートの数も100を超えるという。最も古く，最も神聖なガートのひとつがマルカルニカ・ガートであり，そこは主要な火葬の場でもある。それらの中心に黄金の寺が位置し，まさに宗教都市といえよう。



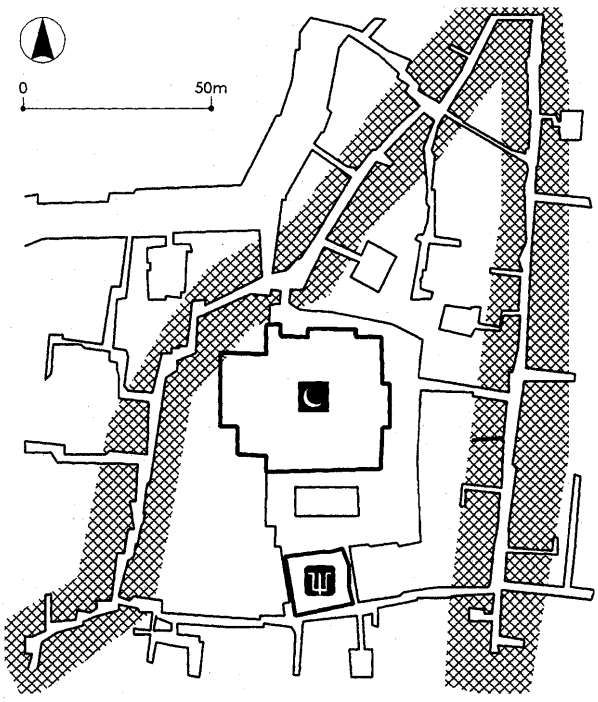
写真－95　ヴィシュワナート小路の入口の門。

写真－96　小路には土産物屋がすきまなく続く。

写真－97　小路には人があふれている。



写真－98　ヴィシュワナート小路は巡礼路のひとつ。



図－32　ヴィシュワナート寺院周辺図

都市域とガンジス川にはかなりの高低差がある。その落差を埋めるために階段が設置され，それはガートの重要な空間要素となっている。

この階段空間により，人はガンジス川という聖なる空間をより明確に意識することができる。その点で，階段空間は聖なる空間への閾といえる。また，実際の生活上においては，3メートル以上も変化する川の水位をうまく吸収する装置でもある。

5㎞に及ぶガートには様々な形式の階段がある。ヴァラナシ最大のガートである，ダシャーシュワメード・ガートでは，階段空間に5m×2.5mのテラスを連続的に配置し，祈りの空間をつくりだしている。また，ガート間の区切りとして，円形のテラスを先端にもつ，壁の要素を配置している場合もある。もちろん階段空間は，都市域から水面までを等間隔で結んでいるわけではなく，傾斜にあわせ適宜段を配置しているため，ところどころで平場が確保され，それが神聖な領域内の広場空間となっている。こうした広場では宗教的な儀式や礼拝が行われる。ダシャーシュワメード・ガートで日没時に行われるプージャと呼ばれる礼拝では，広場一帯が劇場空間になり，まさに神聖なる広場空間が現出する。

(9) おわりに

広大なインド北部地域の内，10都市を約2週間という短い時間で調査しただけでインドを語るのは不遜といえるであろうが，あえてインドに魅了されたといって差し支えないのであろう。様々な風土と，多宗教・多民族・多言語の中の混沌とした世界が，何ともいわれぬ吸引力をもっているのである。インドは広い，インド亜大陸となるとさらに広い世界が広がる。われわれの調査はまだ本当の敷居に立っただけなのではなかろうか。次の調査旅行を組めるのはいつの時期であろうか。

文献リスト

資料001. FOOTPRINT INDIA, ROBERT BRADNOCK·ROMA BRADNOCK, FOOTPRINT HANDBOOKS, 2004

資料002. EYEWITNESS TRAVEL GUIDES INDIA, ROSHEN DALAL他, DORLING KINDERSLEY, 2002

資料003. HANDBOOK FOR INDIA, PAKISTAN, NEPAL, BANGLADESH & SRI LANKA, JOHN MURRAY, 1978

資料004. FOOTPRINT INDIA HANDBOOK 2002, FOOTPRINT HANDBOOKS, 2001

資料005. THE ROYAL PALACES OF INDIA, GEORGE MICHELL, THAMES AND HUDSON, 1994

資料006. ANCIENT AND MEDIAEVAL TOWN-PLANNING IN INDIA, PRABHAKAR V. BEGDE, 1978

資料007. THE PENGUIN GUIDE TO THE MONUMENTS OF INDIA VOLUME II: ISLAMIC, RAJPUT, EUROPEAN, PHILIP DAVIES, PENGUIN BOOKS, 1989

資料008. THE RAJPUT PALACES –THE DEVELOPMENT OF AN ARCHITECTURAL STYLE,1450-1750, G.H.R. TILLOTSON, OXFORD UNIVERSITY PRESS, 1999

資料009. LONELY PLANET NORTH INDIA, LONELY PLANET PUBLICATIONS, 2001

資料010. FOOTPRINT RAJASTHAN, MATT BARRETT, FOOTPRINT HANDBOOKS, 2004

資料011. LONELY PLANET RAJASTHAN, LONELY PLANET PUBLICATIONS, 2002

資料012. RAJASTHAN, LEILA GHOSH·DALIA ROY, COLOUR LIBRARY BOOKS, 1986

資料013. EXPLORE RAJASTHAN –A TOURIST GUIDE, DR. R. P. ARYA他, INDIAN MAP SERVICE, 2003

資料014. STONES IN THE SAND –THE ARCHITECTURE OF RAJASTHAN, GILES TILLOTSON他, MARG PUBLICATIONS, 2001

資料015. DORLING KINDERSLEY TRAVEL GUIDES DELHI AGRA&JAIPUR, ANURADHA CHATURVEDI他, DORLING KINDERSLEY, 2000

資料016. LONELY PLANET DELHI, LONELY PLANET PUBLICATIONS, 2002

資料017. DELHI THE BUILT HERITAGE: A LISTING VOLUME 1, 2, INDIAN NATIONAL TRUST FOR ART AND CULTURAL HERITAGE, INTACH DELHI CHAPTER, 1999

資料018. DISCOVER JODHPUR, MOHANLAL

GUPTA·SHIRI AHUJA, SHUBHDA PRAKASHAN, 1998
資料019. PUSHKAR, BIRAJ BOSE他, LUSTRE PRESS・ROLI BOOKS, 2000
資料020. HEAVEN ON THE EARTH PUSHKAR, PRAFULLA PRABHAKAR, V. P. PUBLICATIONS
資料021. THE SHRINE AND CULT OF MU'IN AL-DIN CHISHTI OF AJMER, P. M. CURRIE, OXFORD UNIVERSITY PRESS, 1989
資料022. JAIPUR 10 EASY WALKS, DHARMENDAR KANWAR, RUPA & CO., 2004
資料023. BUILDING JAIPUR –THE MAKING OF AN INDIAN CITY, VIBHUTI SACHDEV·GILES TILLOTSON, OXFORD UNIVERSITY PRESS, 2002
資料024. BANARAS REGION –A SPIRITUAL & CULTURAL GUIDE, RANA P. B. SINGH·PRAVIN S. RANA, INDICA BOOKS, 2002
資料025. VARANASI CITY GUIDE, SWATI MITRA 他, EICHER GOODEARTH, 2002
資料026. ロンリープラネットの自由旅行ガイド　インド，メディアファクトリー，2004
資料027. 地球の歩き方D28　インド，地球の歩き方編集室，ダイヤモンド・ビッグ社，2004
資料028. 個人旅行⑬　インド，K&Bパブリッシャーズ，昭文社，2003
資料029. 旅行人ノート・スペシャル　インド黄金街道，旅行人編集室，旅行人，2002
資料030. ワールド・カルチャーガイド⑨　インド　魅惑わくわく亜大陸，WCG編集室，トラベルジャーナル，1999
資料031. 地球の歩き方プラス・ワン407　見て読んで旅するインド，地球の歩き方編集室，ダイヤモンド・ビッグ社，2003
資料032. 南アジアを知る事典，平凡社，2002
資料033. アジア都市建築史，アジア都市建築研究会，昭和堂，2003
資料034. インドの建築，神谷武夫，東方出版，1996
資料035. インド建築案内，神谷武夫，TOTO出版，2003
資料036.「インド建築の5000年－変容する神話空間」展図録，飯塚キヨ監修，世田谷美術館，1988
資料037. 北インドの建築入門　アムリツァルからウダヤギリ，カンダギリまで，佐藤正彦，彰国社，1996
資料038. インド史におけるイスラム聖廟，荒松雄，東京大学東洋文化研究所，1977
資料039. インド神話入門，長谷川明，新潮社，2002
資料040. BOOKS ESOTERICA第12号　ヒンドゥー教の本　インド神話が語る宇宙的覚醒への道，学習研究社，1995
資料041. インド旅の本，山田和，平凡社，1997
資料042. 河童が覗いたインド，妹尾河童，講談社，2000
資料043. デリー　アグラ　ジャイプール，スレンドラ・サハイ，プラカーシュ・ブックス，1995
資料044. ベナレス　永遠の街，ヴァルシャ・ラニ，プラカーシュ・ブックス，1996
資料045. 多重都市デリー　中公新書1160，荒松雄，中央公論社，1993
資料046. ジャイプルの街路体系と街区構成　インド調査局作製の都市地図（1925－28年）の分析　その1，布野修司他，日本建築学会計画系論文集第499号，1997
資料047. ジャイプルの住区構成と住居類型　インド調査局作製の都市地図（1925－28年）の分析　その2，布野修司他，日本建築学会計画系論文集第508号，1998
資料048. ジャイプルの街区とその変容に関する考察　インド調査局作製の都市地図（1925－28年）の分析その3，布野修司他，日本建築学会計画系論文集第539号，2001
資料049. ヴァーラーナシー（ウッタル・プラデーシュ州，インド）の都市空間形成と巡礼路および寺院・祠との関係，柳沢究他，日本建築学会計画系論文集第583号，2004
資料050. インド情報検索 Namaskar links, http://challenger.fctv.ne.jp/~masala/namaskar.cgi?mode=ranking, 2005/2/21
資料051. インド専門検索　とってもインド，http://www.eva.hi-ho.ne.jp/tokada/search/india_search.htm, 2005/2/21
資料052. インド・イスラーム史跡，http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~islamarc/WebPage1/htm/index.shtml, 2005/8/5

（あしかわ　さとる　　生活環境学科）
（かねこ　ともみ　　生活環境学科）
（つるた　よしこ　　現代教養学科）
（たかぎ　あきこ　　生活環境学科）
（とくなが　ようこ　　生活環境学科生）